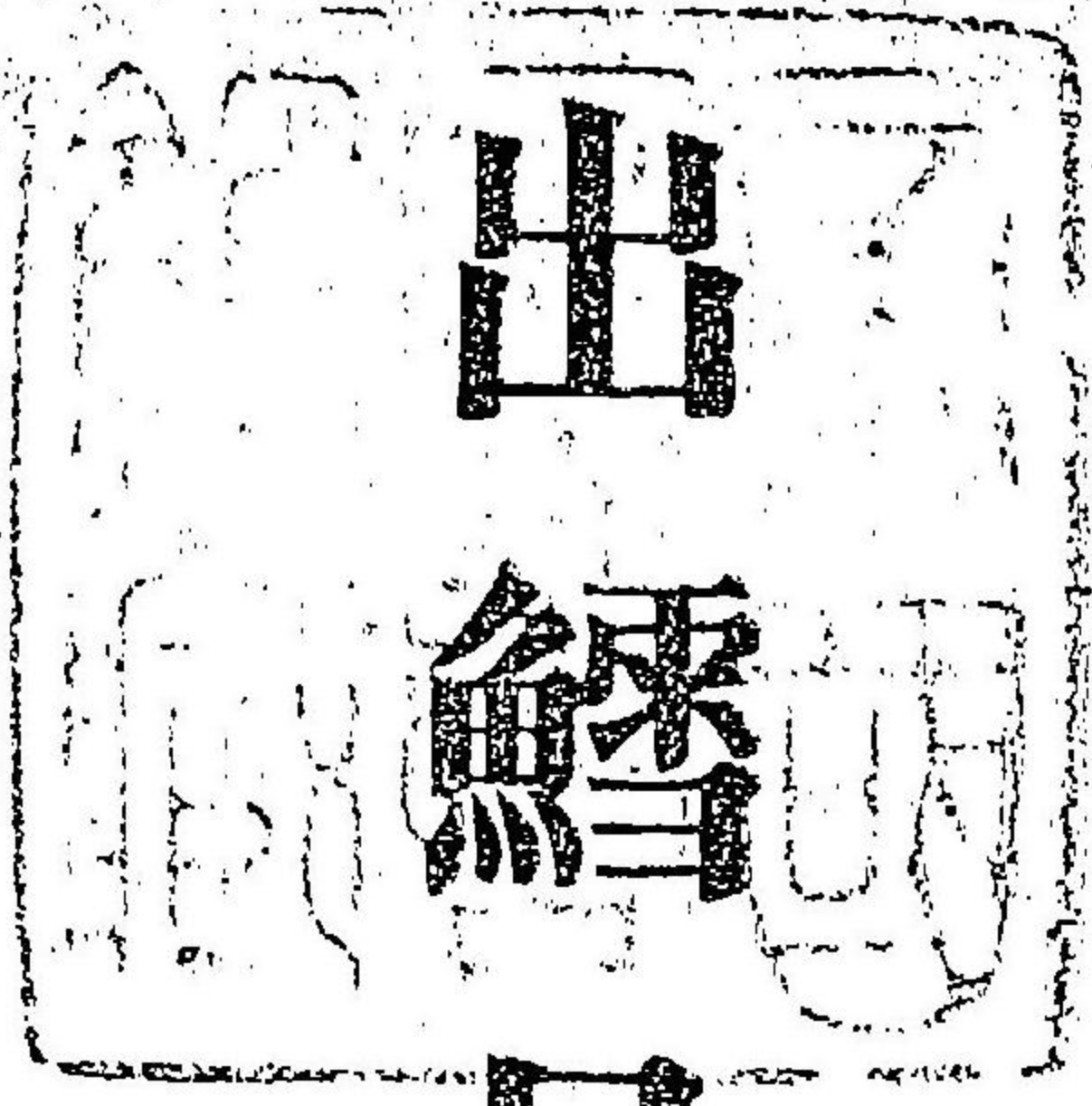


矢野龍溪先生著



出鱈目
の記

東京

會社名 近事畫報社版

明治
38 〃 13
内交

序

デタラメの記は、デタラメの記なり、順序も無く、類別も無く、胸に浮びし事柄を、其儘に書き列らねたるのみ、抑も「出タラメ」なる俗語は、責任も構まはず、深くも思案せず、口より出放題に喋り立るの意義なるに似たり、果して然らば、此の隨筆には、恰當の名稱なり、嚴めしき高尙の名を撰ばむより、矢張りデタラメと爲すの優れるに若かずと、又デタラメに、斯くは名けつ。

明治三十八年九月

矢野龍溪識

I 次 目

第 一	第 二	第 三	第 四	第 五	第 六	第 七	第 八	第 九	第 十
千鳥	俗字	小町の姉	小町	業平	歌の題及び名前	黒主	酒を盗まれぬ法	水に溺れぬ術	信玄、謙信と高歡、宇文泰
一	二	三	四	四	六	七	七	八	九

目	次	2
第十一	文那人物最盛の時代	一一
第十二	人口	一二
第十三	蜀の人口	一二
第十四	孫權の遠征	一三
第十五	野武士	一四
第十六	左に避る	一四
第十七	右に避る	一六
第十八	左射騎	一七
第十九	右を利手とする原因	一八
第二十	千鳥の香爐	一九
第二十一	石川五右衛門	一九
第二十二	衛國の人なり	二二

目	次	3
第二十三	鶯の聲	二三
第二十四	黄鳥	二四
第二十五	兩箇の黄鸝	二四
第二十六	鶯も有り	二五
第二十七	河豚汁	二五
第二十八	和聖東	二六
第二十九	智勇よりも徳	二七
第三十	郭子儀	二八
第三十一	まめな人	二八
第三十二	四度目の女	二九
第三十三	沙翁	二九
第三十四	昔の芝居	二九

目	次
第三十五	態度……………三〇
第三十六	繪の人物の態度……………三一
第三十七	雨の上野(卅六年の春)……………三二
第三十八	蘇人の冒険……………三六
第三十九	駱駝……………三七
第四十	支那の象……………三九
第四十一	戦象……………三九
第四十二	班尼拔爾……………四〇
第四十三	今宵もや……………四六
第四十四	誤傳……………四七
第四十五	將門……………四八
第四十六	孔雀の羽……………四九

目	次
第四十七	蹄鐵……………五〇
第四十八	鳩の羽……………五〇
第四十九	小鳥の飼方……………五一
第五十	畫眉鳥……………五二
第五十一	梅……………五三
第五十一	楊梅……………五四
第五十三	柳絮……………五五
第五十四	絮の用……………五六
第五十五	大阪陣……………五七
第五十六	後藤又兵衛……………六一
第五十七	塙直次……………六一
第五十八	真田幸村……………六二

目	次
第五十九	木村長門守……………六三
第六十	誤用し易き語……………六四
第六十一	必や……………六四
第六十二	必しも……………六五
第六十三	蝟……………六六
第六十四	蜘蛛……………六七
第六十五	漢字……………六七
第六十六	峻徳……………六九
第六十七	良醫の心得……………七〇
第六十八	實名の音讀……………七一
第六十九	三絶……………七三
第七十	黄巢の菊花……………七三

目	次
第七十一	張元の雪……………七四
第七十二	秦檜の注意……………七五
第七十三	鶴棲松……………七六
第七十四	戀歌……………七七
第七十五	俗歌……………七九
第七十六	情の濃なる者……………八〇
第七十七	誤字……………八〇
第七十八	可憐の人……………八一
第七十九	粥の字……………八二
第八十	笑……………八四
第八十一	像の黄金頭……………八五
第八十二	天文家の機智……………八六

頁	次	目
第九十六	第百一	繪畫と事實……………一〇一
第九十六	第百二	事實と相違……………一〇三
第九十七	第百三	摩詰の雪蕉……………一〇四
第九十八	第百四	夢の地……………一〇五
第九十九	第百五	帽子屋の看板……………一〇六
第百	第百六	其の通り疑ひなし……………一〇七
第百一	第百七	誤解の騒ぎ……………一〇八
第百二	第百八	雑報の標題……………一〇九
第百三	第百九	悪戯の一……………一一〇
第百四	第百十	獨りかも寝ん……………一一三
第百五	第百十一	二歌の優劣……………一一五
第百六	第百十二	鬼のしこ草……………一一六

頁	次	目
第八十三	第九十三	鵜飼……………八八
第八十四	第九十四	鰻魚……………八九
第八十五	第九十五	銀魚……………九〇
第八十六	第九十六	菽乳……………九〇
第八十七	第九十七	町が失せた……………九一
第八十八	第九十八	吹簫の客……………九三
第八十九	第九十九	景季夫婦……………九三
第九十	第一百	女嫌ひ……………九五
第九十一	第一百一	岳王墓……………九六
第九十二	第一百二	宜しき事なり……………九七
第九十三	第一百三	屠蘇酒……………九九
第九十四	第一百四	雑 煮……………一〇〇

目次	目
第一百十九	人の名……………一二八
第一百二十	孟子の子、韓信の子……………一三三
第一百二十一	雙生兒の兄弟……………一三二
第一百二十二	艦上の雄鶏……………一三三
第一百二十三	ガラスの破片……………一三五
第一百二十四	機械に注意する古名將……………一三六
第一百二十五	砲の石丸……………一三九
第一百二十六	六韜三略……………一三九
第一百二十七	廿五節四萬噸……………一四六
第一百二十八	見え透きたる世界……………一四七
第一百二十九	蓬萊山……………一四八
第一百三十	扶桑……………一四九

目次	目
第一百七	蜀山人、唐伯虎……………一二七
第一百八	蟠桃……………一二八
第一百九	西王母と乙姫……………一二九
第一百十	義の字……………一二一
第一百十一	漢壽亭侯……………一二一
第一百十二	梁山伯の三十六人……………一二二
第一百十三	大内來……………一二三
第一百十四	飛鳩、蛛網……………一二四
第一百十五	饅頭……………一二五
第一百十六	指輪……………一二五
第一百十七	看菓……………一二六
第一百十八	王新建伯……………一二七

第百四十三	短き寶劍……………	一七四
第百四十四	杜預と西洋紙……………	一七五
第百四十五	鬮引と婚禮……………	一七六
第百四十六	雙六の傳來……………	一七八
第百四十七	下戸の詩人……………	一八一
第百四十八	吉備大臣入唐の圍碁……………	一八一
第百四十九	左側に沿ふ支那の通行法……………	一八五
第百五十	茶、蓮茶……………	一八六
第百五十一	珈琲……………	一八九
第百五十二	煙草……………	一九〇
第百五十三	人が見たら蛙に爲りし話……………	一九一
第百五十四	竿頭の珠燈……………	一九三

第百三十一	ライオン初て見ゆ……………	一五〇
第百三十二	荔枝と龍眼肉……………	一五一
第百三十三	獅子と彩球の圖……………	一五三
第百三十四	暖簾……………	一五四
第百三十五	招牌の奇文……………	一五五
第百三十六	人の至情……………	一五六
第百三十七	菊の本来……………	一五八
第百三十八	菊花羹……………	一六一
第百三十九	扇子の本来……………	一六二
第百四十	萬歳の祝聲……………	一六五
第百四十一	川柳點……………	一六七
第百四十二	奈破翁、布烈的力……………	一七三

目	次
第一百五十五	油中の小判……………一九三
第一百五十六	黄金の釜にあらず……………一九五
第一百五十七	潤筆料……………一九五
第一百五十八	仙家の日月……………一九六
第一百五十九	側射面……………一九七
第一百六十	薩摩芋と鮪……………一九九
第一百六十一	昔の里芋の相場……………二〇〇
第一百六十二	金と銀との差價……………二〇二
第一百六十三	將來は物價益々騰貴せむ……………二〇五
第一百六十四	世界諸國の金銀在高と金銀の産額……………二〇六
第一百六十五	尾のある人……………二〇九
第一百六十六	連結せる雙生兒……………二一一

目	次
第一百六十七	撲滿……………二一二
第一百六十八	鉛筆……………二二三
第一百六十九	水經と西遊記……………二二五
第一百七十	竹中の人……………二二八
第一百七十一	相ひ似たる話……………二一九
第一百七十二	毒蛇の退治法……………二一九
第一百七十三	似たる想像……………二二〇
第一百七十四	雪達摩……………二二二
第一百七十五	梨酒……………二二二
第一百七十六	人の名……………二二四
第一百七十七	奇なる姓名……………二二八
第一百七十八	名士と名花……………二二九

第九十一	平井の保昌	二六三
第九十二	反對の兄弟、誤傳	二六四
第九十三	胡椒から印度帝國	二六五
第九十四	鈎の暖簾	二六八
第九十五	白河の魚	二六九
第九十六	北支那の豆腐	二七〇
第九十七	一生不賦海棠詠	二七〇
第九十八	佳句	二七一
第九十九	劉基の詩	二七二
第二百	支那人の詩思	二七三
第二百一	西施の行末	二七四
第二百二	南荒に佳人あり	二七五

第七十九	櫻の歌と發句	二三一
第八十	牡丹	二三八
第八十一	牡丹と猫の圖	二四〇
第八十二	畏と服との別	二四二
第八十三	最も舊るき電光壕	二四七
第八十四	朝鮮征伐の太閤	二四八
第八十五	怪談	二五一
第八十六	龍城録	二五二
第八十七	子不語の一節	二五四
第八十八	怪物の仕損じ	二五八
第八十九	大江山入の人数	二六〇
第九十	四天王	二六一

目	次
第二百十五	羽蒲團……………二八六
第二百十六	無風獨搖草……………二八六
第二百十七	媚藥……………二八七
第二百十八	無核の荔枝……………二八八
第二百十九	蜂雀歟……………二八八
第二百二十	孔雀の捕へ方……………二八九
第二百二十一	蚊母鳥……………二九〇
第二百二十二	竹蛇、小兒樹……………二九〇
第二百二十三	比目魚……………二九一
第二百二十四	睡蓮、夢草……………二九二
第二百十五	北清の白魚……………二九三
第二百十六	一時に六藝……………二九四

目	次
第二百三	仙人騎鶴……………二七五
第二百四	阿瞞……………二七七
第二百五	正儀と文壁……………二七七
第二百六	健忘……………二七八
第二百七	道灌の辭世……………二七八
第二百八	支那の弓……………二七九
第二百九	支那の矢……………二八〇
第二百十	老兵の一小隊……………二八一
第二百十一	吝嗇……………二八二
第二百十二	無言の使節……………二八三
第二百十三	追々に……………二八四
第二百十四	ソリヤ火事だ……………二八五

第二百十七 狸々の面相……………二九五

第二百十八 巧思の人形……………二九六

第二百十九 誤字、誤植……………二九七

出鱈目の記



矢野龍溪 著

古へは、群がる小鳥をば、すべて千鳥と云ひしものによ、萬葉集の中に、

我が門の榎の實もらはむ百千鳥

千鳥は來れと君は來まさぬ

と云へる句あり、蓋し榎の實を來り啄む小鳥は、例によつて來れども、待人は來らず、との意ならん、民家の門前なる榎の木の実を來り啄む鳥は、山の鳥にして、今の俗に謂ふ千鳥にあらざること分明なり、今の千鳥は水邊に集る小鳥ゆゑに、其昔

第二百十七 狸々の面相……………二九五

第二百十八 巧思の人形……………二九六

第二百十九 誤字、誤植……………二九七

出鱈目の記

千鳥

矢野龍溪 著

古へは、群がる小鳥をば、すべて千鳥と云ひしものによ、萬葉集の中に、

我が門の榎の實もらはむ百千鳥

千鳥は來れと君は來まさぬ

と云へる句あり、蓋し榎の實を來り啄む小鳥は、例によつて來れども、待人は來らず、との意ならん、民家の門前なる榎の木の実を來り啄む鳥は、山の鳥にして、今の俗に謂ふ千鳥にあらざること分明なり、今の千鳥は水邊に集る小鳥ゆゑに、其昔

しは濱千鳥と呼びしものならん、夫の

遠くなり近く鳴海の濱千鳥

啼く音に汐の満干をぞ知る

と云へるは、磯邊に集まる小鳥にて、是ぞ今の所謂千鳥なるべし、初めは濱千鳥と呼びしものが、終には一種の固有名詞と變じ、衡なる一箇の俗字をさへ生ずるに至れり。

俗字

俗字にも極めて便なるあり、上り下りの絶頂を峠と書し、(後には官字ともなれり)又上下(則ち衣と裳と)を袴と書するの類、頗る適當にて且つ便なり、之等は俗に従ふを可とす、但し或地方にては差支ふると云へる場合に、問の字を用ひるあり、門を入らんとし山あるは、頗る差支ふるに相違なし、但此字は餘り廣く用ひられぬや

うなり。又門を鎖す貫板の横木を門と記するなど頗る自在にて可笑し、戸の中に鼠の字を入れて、「ペスト」と爲すも亦た妙なり、但し字畫の多きを憾む。

小町の姉

前の「我が門」なる句にて思ひ出だせしは、待人の來らざるを啣つ意味の歌に、

我が門の一叢すゝき苜蓿飼はむ

君か手馴れの駒も來ぬかな

と云へるは、如何にも古調にして情あり、此の作者は後撰集に小町の姉とありて名を記せず、此人も當時は人に名を知られしものならんに、後世に至りては有名なる妹の姉とのみ記憶されしは果敢なし、(古今集にも小町の姉と記せし歌一二ありしと覺ゆ)、因て思ふに、姉妹とも斯く詠歌に巧みなるは、小町が成長せし家庭の態も思ひやられて床し。

小町

古へより定評あり、今更ら吾々の評を待たねども、小町の歌こそ何づれも際立ちて
覺ゆ、

うた、寝に戀しき人を見てしより

夢てふものは頼み初めてき

の如き境の眞なる、情の濃なる、他に類なし、清少納言杯の如き唐様の趣味なく、
何處までも大和様なる所、一種の趣きありて愛でたし、但し此人が後世に傳る如き
絶世の佳人なりしや否やは、些と疑はし。

業平

六歌仙の中に、業平こそ、くせものなれ、如何にも此人は一物ありし迹、陰然と

して、睹るが如し、夫の「雪踏分けて君を見んとは」の句のみにはあらず、總じて
其歌に氣骨あり、王孫には珍らしき人物ならん、業平の母が、

老ぬれば左らぬ別れもありと聞けは

いよ／＼見まくほしき君かな、

と云へる歌を送りしに對し業平が、

世の中に左らぬ別れのなくもかな

千代もと祈る人の子の爲め

と詠みし歌の題を、古今集にはたゞ「返し」とのみ記しあり、予は之を讀みしとき
に、斯くまで慈母の會ひたしと言ひ寄せしに、たゞ返歌を送りしのみとは、子の情
として業平も悠長至極の人なりと、思ひしこともありしが、後ち、伊勢物語を見し
に、母君より歌を送らるゝや否や業平は、取るものも取敢ず、馬に乗り尋ね往きて、
泣く／＼途すがら詠みしは、則ち此歌なることを知れり、されば歌の題は心して書

くへまきものにこそ。

歌の題及び名前

又た題と名前のことにて思ひ出だせしは、百人首の中に

天津風くもの通ひ路ふきとちよ

乙女の姿しはし留めむ

と云へる句の詠み人の名を僧正遍照と記せり、此歌は宮中の舞姫を見て、其曲の終るを惜み、尙ほ暫らく舞へかしの意を叙べしものよし、さらば世捨て人たる僧侶の身としては似合はしからずと思ひ居たりしに、古今集には吉岑の宗貞と記せり、此方をまされりとす、此人が宗貞と稱し、弱冠にして藏人の頭を勤め天子の寵臣として宮掖に出入し、主上に玩ばれて、尋常の女と認め誤り、皇后の袖を引きたりし男盛りの頃にこそ、五節の舞姫の樂を見て、斯く詠せしこともあらんと思へば、歌

と人名と相應せり、然るに天子の崩後剃髮して世捨て人となりし後の僧正遍照なる名前を記せしは稍其歌と不釣合に見ゆ、但し後世にては僧正遍照の名前、歌人として能く通りしが故に、百人一首の撰者も或は餘義なく遍照と記せしにやあらん、さらば致し方なし、併し此僧正折々は諧謔を爲す癖なきにもあらず、夫の「女郎花」の歌の類なり。

黒主

大友の黒主は歌人たる外、餘り事業に聞くこともなき人なるに、黒主といふ名のいかめしきがため、思はぬ冤罪を被り、後世芝居などには反逆人に仕組まれ、或は小町の草紙洗ひの相手に引出ださるゝなど迷惑千萬なり。

酒を盗まれぬ法

昔し米國にて或家の主人、良き葡萄酒を藏ひ置きしに、折々家人にやあらん之を盗み飲む者あり、此主人フランクリンと懇意にて其智者なるを知るものから、此人に問はゞ必ず盗まれぬ好手段あるべしとて、一日フランクリンに會ひしとき此事を語り出で、何か名案なきやと問ひしに、フランクリン最と無造作に、其は極めて容易なりと答へしかば、切に其手段を請ひ問ふ、フランクリン微笑して曰く、最上の三鞭酒を盗みよきやうにして葡萄酒の傍に置くべきのみ、さすれば誰も葡萄酒を盗む者なかるべしと、主人啞然たり。

水に溺れぬ術

或人の家訓に水に溺れざる法と云へる術あり、之を緋けば乃ち曰く、水に近かざるなりと、是亦たフランクリンの答の類なり。

信玄、謙信と高歡、宇文泰

予が幼時に、大父君の膝下にて歴史談を聞きしとき、齊の高祖(高歡)、周の太祖(宇文泰)と信玄、謙信とほど能く類せるものなしと語られしを仄かに記憶し居りしが、後ち長じて南北史を繙くに及び始めて、二人の性行、實に信玄、謙信に似たるものあるを知れり、高歡の機變ありて權略に富める、宇文泰の雄拔にして俠氣を帯べる、其他兩人が兵を行り士を養ふの有様、實に一方は宛然たる信玄にして、一方は謙信なり、又た信玄、謙信の間にて一大血戦と稱せらる、川中島の戦は、初めは甲に利して、後には乙に利ありしも、其勝敗分明ならず、雙方共に敗衄の姿あり、高歡と宇文泰との間に於ける一大血戦と稱せらる、岵山の戦も、亦た初めは甲に利にして、後には乙に利ありしも、雙方共に敗衄の姿あるを免れずして、何れを勝、何れを敗とも定め難し、兩人終身相敵して、相ひ勝たざるの有様亦た實に相類す、信玄、高

歡が先きに死して、謙信、宇文泰が後に死せる亦た相似たり、殊に信立と高歡とは其性行、人品の相似たるのみならず、其事歴亦た相類す、信立の終焉は野田の城にて小銃に狙撃せられ重傷を負ひしに因るとの説あり、高歡の終焉は玉壁の圍みに定功弩に中てられたる重傷の致す所なりとも傳ふ、又た信立は其遺骸を諏訪の湖心に埋めて人に所在を知らしめざりしと傳ふ、高歡は其石棺の所在を秘して人に知らしめざりしと云ふ、之等の事々相類するも蓋し亦た一奇なり、高歡、宇文泰ともに正道を以て之を規すれば、兩人とも大缺點あり、正人君子の稱揚する所にあらざること勿論なれば、暫く此點を措き、唯だ其人物に就て之を評すれば、彼れ二人の大略ある、氣魄ある、豪爽なる、英邁なる、士を愛する、兵に長ずる、國を治る、民を撫する當時の南北史中に於て獨り其儔なきのみならず、支那歴史を通じて蓋し亦た得難きの材なり、彼等兩人に比較すれば、南土の人士、一の顔色ある者なし、彼の侯景が高歡の爲に宇文泰に使せしや、泰の一喝に遇ふて、濡れ鼠の如く逃げ歸りし

有様は、其人品、泰に比すれば無下に下れるものなるに、彼が一度び南土に入るや、梁の武帝を翻弄して臺上に餓死せしめ、全土を蹂躪して、傍若無人の振舞を爲せしを見て、南北人士の輕重を察するに難からず、北史中には實に快心の人物多し。

支那人物最盛の時代

支那にて古今を通じて、人物の最も多きは、三國時代なりとは、諸家の通論たるに似たり、若し一人物に付いて之を評すれば、此時代の人物に超出する者ある時代なきにあらねども、異種多様の人物が時を同じくして一世に出現せるは蓋し此頃に若くものなし、是れ此評ある所以ならん、此時代の最負役者たる諸葛孔明は、彼の人品上より想像して何人も、定めて此人は風姿すらりとして身長、高からず低からず、寧ろ瘠形ならんと考ふると見え、和漢とも此人を畫くに其體格常に斯の如し、然るに實際、此人は「身長六尺にして狀貌甚だ偉なりし」こと事實なり、即ち大男にして

一見偉丈夫の觀ありしと見え、或一書には玄徳が初見のとき(草廬を訪ひし前なり)其容貌の偉大なるに驚き、常人にあらすとして共に語つて大に喜びしとあり、されば大男たるは疑ひなし、若し實録の儘に此人を描くあらば、今日世人は訝る者もあらん。

人口

支那にて三國時代は實に人口稀疎なりし、此亂の前に於ける後漢の末年桓靈の頃は人口繁殖したりと稱すれども、政府の戸籍に登り居りし人口は尙ほ三千万内外なりき、然るに董卓の亂以來、三十四年間に人口非常に減じ、三國割據の末は實に僅少の人口なり。

蜀の人口

孔明が蜀を治め民を養ふに意を用ひしは人の知る所にて、多少戸口は増加したれども、蜀亡びて其版圖が魏に入りしときの戸籍は、戸數僅に二十萬なり、一家五人としても一國の人口僅に一百萬人のみ、今日我國の二縣を合せし程に過ぎず、之を現在支那の四川省(即ち蜀)の人口六千萬人に比すれば、古今多少の差も實に甚し。

孫權の遠征

吳の孫權が軍艦を艦裝て東海に遠征の一軍を出だせしも、其目的は東洋の中より人民を擒にして、之を吳に持歸らしむる目的に過ぎざりしが如し、遠征の目的たりし地方は確かならねども、琉球方面又は我國にありしものに似たり、其謀臣張昭の諫疏中にも遠征の目的が人口を得るにありしことを記したりと覺ゆ、兎に角支那にては大亂の後必ず非常なる戸口の減少を見るを例とす、是れ一は民を驅つて兵となし大に民間を紊ると、一軍の向ふ所必ず其地方の民を屠り、又は之を驅使し、食を

奪ひ人を役し、大軍の過ぐる所、地方を疲弊せしむるに因る、此一事は我國と大に趣を異にす、我國にては兵農の分ること久しく、戦のため鋒鏑に死する者は兵にして民にあらず、故に何れの時代にも戦争のために平民に及ぼす惨状支那の如く無かりしならん。

野武士

支那にては勝兵敗兵共に無遠慮に途上の民家を略奪す、我國にては是に反し、農民は野武士となりて、却て落武者を略奪す、是亦た東西の相違なり。

左に避る

近來東京にて、警察の取締に依り、車馬の途中に會ふものは互に左に避け、人馬共に道の左側に沿ふて往來するは、外國の例に倣ひたることにて、歐米何れの國にて

も、道を避くるの例は皆な斯の如し、(國柄に依り、稀には右に避くるの制を採るものあれども、十の八九は、概して左に避く) 單り人馬のみならず、鐵道の如きも列車をば左側のプラットフォームに停むるを通例とす。

歐米にて斯く左に避くる慣習の起源に就ては、種々の説あれども、予が讀みし西書中にて最も信すべしと考ふるは、封建の武士時代より始まれりとするもの是なり。歐洲中世封建の時代に、武士が相會ふときは必ず左に避けたるものなり、是れ敵に對して互に右手を利用し、劔を抜き相ひ當るの便利を得るより始まる、若し斯くせずして互に右に避くるときは、利手の便を失ひ、敵に取控がるゝの恐れあり、故に封建時代に之を以て武士相避くるの禮式と爲せしも、左あるべきことにて、從て萬事皆な左に避る慣習とは爲れり。

故に中世歐洲にて、男子が婦人を導くときは、必ず婦人を左腕に着かしめ、いざと云はゞ、右手にて婦人を防禦するの姿勢を守りしものなり、近世の禮式を論ずる書

にも、男子が婦人を導くのは正式は、左腕に着かしむべきものとせり、但し取除けの場合に於て、左に危険あるときは、婦人を右の手に着かしむべきものとす。然るに、今日平和の世となりては、其趣も自然と變遷し、男子の左腕に着くときは、婦人は右手を是れに掛るが故に、利手の便を失ふの不便あり、故に却て男子の右手に着き、左手を是れに掛け、己の利手を遊ばせて扇子などを使ふの便を好み、終には男子をして右手を以て導かしむるもの多きに至る、世の治亂に依り、禮式の變遷亦た斯の如し、夫は兎もあれ、相會ふて左に避くるの慣習、敵に對して右なる利手を役立てんとするに始まりしこと、稍や信すべきに似たり。

右に避る

然れども刀劍と弓箭とは又自ら趣きを異にす、騎射の士が敵と相會ふとき之を射んと欲すれば右側に避けざるべからず、敵手を免れんと欲すれば左側に避けざるべからず、何となれば、弦を控くは右手なるが故に、弓は能く左側の敵を射れども、右側の敵を射る能はざればなり、故に混戦のとき、敵の矢先を免れんとする老兵は、敵の右側に接近して走せ抜けたりと見ゆ。

老兵某が、嘗て頼朝の前にて昔物語を爲せしとき、保元の亂、接戦中に卒然と爲朝に出會ひ、彼の右側に接近して走せ抜けたるが爲め、其矢先を免れたり、若し左側に避けたるならば、とても今日あるを得ざるべし、と語りしに、一坐皆な其心得を感嘆せること、東鑑に記しありと覺ゆ。

左射騎

故に支那にては、左射騎と稱する騎兵を養ひし時代ありて、是の騎兵は多く貴人親衛の兵たりし如し、天子の行幸などに扈從せる騎兵は、乘輿の左に在る者は左側の敵を射るの便あれども、乘輿の右側に在る者は、右手に弓を控けば右側を射る能は

ず、故に此場合には左手に弦を控き右側の敵を射得べき左射の騎兵ありて始めて乘輿の左右兩側を護衛するを得べし、支那中世の官名に左射騎都尉なるものあり、即ち左射の騎馬隊長なり、日本西洋ともに此類のものは古へより無きやうなり。

右を利手とする原因

右手を利手とすること、古今萬國の人類、皆な同様なり、其の理由如何んと云へる問題を生ず、ドクトル、フーグル氏の説に、右を利手とするは獨り人類のみならず、猿及び鸚鵡の類まで、皆な斯の如し、故に其の原因は必ず動物身體の構造に在るべし、人類の左側半身が、右半身よりも血液を取るの自由なると、及び内臓の重みが左側に偏り、從て人體重力の中心が、左側に偏し居るの二事は、蓋し其の重なる原因ならんと、又或る生理家の説に、人の運動を支配する能力は、頭腦の右側に在り、之れ右を利手とせしむるの原因なりと、此説に比すれば前説を優れりとす、後

世は遺傳の爲め、益々右手の發達を助けたるべしと雖も、其の原始に遡るときは、人身重力の中心の偏し居るなど或は是が源を爲せしならん。

千鳥の香爐

古へより歌人は鴨川の千鳥の聲を愛し、往々夜更けて會を催せしを記せしものあり、東山將軍なども其一人なるべく、彼が千鳥を聞くため鴨漕に遊びしとき、携行きし香爐が千鳥なる名を得しより、後世に至り遂に千鳥の形を爲せし香爐として傳へられ、夜中に人の忍び來るときは、香爐自ら千鳥の啼く音を發すと云へる物語さへ生ずるに至れり、千鳥の香爐は今に保存さるれども、其形は尋常のものにて、千鳥の形にあらず。

石川五右衛門

石川五右衛門が、豊公の寢所に忍び入りしとき、枕頭なる千鳥の香爐の啼く音を立てさせじと、蜀江の錦もて之を蔽ひたりとの物語あり。

察するに、五右衛門は荆軻にして盗跖にはあらず、然るを後世に泥棒の本尊の如く謂ひなざるは、泉下の彼も遺憾に思ふならん。

五右衛門果して物取り盗賊ならんには、金庫にこそ忍び入るか、左なくば豊公内帑の納戸藏などにこそ忍び込むべし、何の必要ありて其の寢所には侵入せしや。

天下を掌握する豊公なりとて、其の金銭は増田右衛門尉などこそ保管すべけれ、本人の寢所に大金を置くべき理なきは、五右衛門如何に無智なりとも、之を知らざるの理なし、彼れ果して盗人ならば寢所に入るの危険を犯さずして、土藏破りをこそ爲せしならん。

侍衛の勇者として豊公の次室に臥せる仙石權兵衛の足を誤りて踏まざりせば、彼の首は首尾よく豊公の胸を洞して、世に如何ばかりの大影響をか生じけん。

秀次已に關白職に居り、豊公の後継者たらんと期せしに、晩年に至り豊公の實子は淀君の腹に生じたり、爾後秀次の位地は危きこと風前の燈の如し、秀次の附役たる木村常陸介など豊公を除かんとの隠謀は決して是れなしとも云ふべからず、古き太閤記に常陸介が五右衛門を語らひしとを記したるは、或は事實の面影ならん。

五右衛門と常陸介との間に、如何なる縁故ありしや審かならねども、蓋し辭し難き深き關係は從來彼等二人の間に存在せし爲め、五右衛門は此大役を引受けたるものと見ゆ、夫の六國を盟服せしめ、威勢天下に震ひたる秦の始皇に比するも、豊公當時の威光は、敢て劣るべきにあらず、恐らくは海内の人、彼の面を正視し得るものすらなかりならん、是時に當て然諾を重んじ大膽不敵にも彼を刺さんと企てたる五右衛門の舉動は、慥に宛然たる一荆軻なり。

其の縛に就きし後ち、妻子と共に鴨嶺に油煎りと爲られしを事實とせば、彼は一諾の信を重んじ如何なる苦痛をも忍びて遂に一語の實を吐かざりしものと見ゆ、若し

通例の泥坊ならんには、打首梟首にて相當なり、豊公何を苦んで斯る未曾有の酷刑を、一小賊に加ふるの必要あらんや、當時の事勢より察するも、五右衛門の舉動は、普通の物取り盜賊にあらずして、或る一種の重大なる意味を含みたるを察すべし。彼は終に事實を白状せざりし、彼は斯くして遂に後世までも泥坊と爲り了れり、彼は妻子と共に油煎りにせらるゝも尙ほ然諾を重んじたり、蓋し彼は盜跖の類にあらず。

若し當時支那の如き文學の士ありて、實を探り事を叙したりしならば、我國にも一個の荆軻を見るべかりしに、空く「石川や濱の眞砂は盡くるとも」の野卑なる辭世の歌まで偽作せられ泥坊の先達と稱せられしぞ是非もなき。

衛國の人なり

鄭衛は古へ淫靡の國と稱す、戰國の春秋を距ること遠からざる、其の遺風は尙ほ鄭

衛に存せしならん、然るに荆軻は衛の人なり、奇士の生ずる、必しも風氣に因らざる哉。

鶯の聲

聯想の力は大なるものにて、古人の詩歌に入りし鳥の聲は、殊に趣きを感じること、何人も同様にて、青春の長閑なる日、花樹の間に鶯の囀るを愛でぬ者なし、偕鶯の囀り聲の「ホーホケキヤウ」とは、いつの頃より言ひ初めたるにや、佛家が法華經の功德を説く前にも鶯の啼く音は「ホーホケキヤウ」と古人にも聞えしにや覺束なし左るからに或人の狂歌に

法華經の渡らぬときは鶯も

神樂歌をや囀りにけむ

とあるも穿ちて可笑し。

黄鳥

我國にては、鶯のことを、黄鳥又は黄鸝と同物に思居る人多きやうなり、予も亦た爾か思ひ居たりしが、清國に往き、始めて別物たるを知れり、黄鳥一名黄鸝と云へるは、囀り聲も綿疊としておもしろく、鶯の啼く頃に囀る鳥なるが、我國の鶯に比すれば形大にして、色も直黄なり、目の縁及び羽毛に、少許の黒點あり、支那花鳥の畫には往々是れあり、其大いさ、我國の椋鳥と同じく、尾短くして其姿も亦た椋鳥に類す、此鳥を黄色にして、眼邊と羽毛に幾多の黒點を加へたるものと思はゞまぢがひなし、支那にては此鳥を夫婦鳥とも謂ふ、如何なる場合にも必ず雌雄雙飛す。

兩箇の黄鸝

三體詩に「兩箇黄鸝啼翠柳、一行白鷺上青天」と云へる句あり、兩箇の黄鸝とは唯だ

偶然に二羽の鳥と詠せしものと思ひ居りしに、此鳥の必ず兩々相伴ふの實際を見るに及で、始めて其偶然ならざるを知れり。

鶯も有り

然らば支那にて黄鳥、黄鸝の外に、日本の鶯なる鳥は無きやと云ふに、矢張り是れあり、春晚夏初、西湖の邊にては、鶯の頻に囀り居るを聞けり、依て此鳥をば、支那にて何と呼ぶやと聞きしかども、答へ得る者なかりき、さて支那の西湖邊ながら尙ほ「ホーホケキヤウ」と囀り居たるもおかし。

河豚汁

河豚を喰ひ、折々中毒するは、支那にても珍らしからず、同國の或地方にて、相應なる身分の者七人集まりて河豚汁の會を開き、散々に飽食せし後ち、暫時にして、

其の中の一人、俄に卒倒し苦痛せしかば、すわ中毒とて大騒ぎとなりしが、他の六人も薄氣味悪るく、今や腹痛を催すならんと安き心もなかりしに、同國にて河豚の毒を消すには糞汁を飲むを可とすとの言傳あるより、命には易へ難しと遽に糞汁を煎じ、六人の者も臭氣を忍び、したゝか之を飲みたるに、程なく醫師も來り彼の病人を診察せしに是は本人持病の胃痙攣にて中毒にあらずと分り本人も程なく平癒せしにぞ、他の六人は糞汁の飲み損をなせしとて、非常に残念がれども及ばず、是等は早まり過ぎたる失策。

和聖東

和聖東は誰も知る如く盛徳の人にして、壯年の頃より天真爛漫たること多し、米國の獨立前に、土蕃及び佛國殖民との戰に於て氏は始めて邊境に戰功を立て武名を著はし、遂に撰まれて、殖民地の議員と爲りし時、議院は大に氏を歓迎し、議長ロビ

ンソン氏議院を代表して、氏に對し滔々と謝辭を述べたり、和聖東は之に對し起て答辭を述ぶるの場合となり、頻にブル〜と體慄ひ、ろくに答辭も爲し得ずして、簡單なる數語を述べ、其の場合頗るまづく見へしが、議長ロビンソン氏は笑を含み、起て和聖東に向ひ、「君が十分に答辭をも述べ得ざる謙讓の有様は却て余が千萬言の演説よりも眞價あり」と議院に執成したりと云ふ、氏の如く功に誇らず其の動作に飾なき人は稀なり。

智勇より徳

凡そ將軍元帥杯の傳記を讀むとき、讀者の目につく者は其の智勇なるを例とす、然るに和聖東と郭子儀の傳を讀むときは讀者の眼につくものは其の智勇よりも寧ろ徳行なるが如し、是れ將帥として二人の出色なる所。

郭子儀

郭汾陽の寛裕にして、廣く人を容るゝところ、當時氏と肩を比らべたる名將李光弼とは全然、相ひ反す、李は、てきはきとして、軍容靜肅、號令嚴明、眞に將帥の風あり、郭に至ては幾んど取締りなきが如く見ゆれど、大體に於ては將士の和を得、戦はずして先づ敵をも歸服せしむるの風あり、此人は實に大臣として支那絶代の偉人なるべし。

まめな人

和聖東は、後人の想像する如く、實際も寡言の人なりしが、其の手紙を書くことは又極めてまめなりしと見え、今日に存する書簡の數は實に夥しと云ふ、但し間々綴字文法の間違ひたるものもありと云ふこと、近刊の米國雜誌にも見たり。

四度目の女

氏は斯る人なるが故に、女子に喜びらるゝことも、亦た少なかりしと見え、或書に記する所に據るに、氏の妻は四度目に懸想せし婦人にて、最初の三人からは結婚の申込みを拒絶せられたるなりと。

沙翁

和聖東に比すれば、沙翁などは、餘程、すばやき方と見え、十九歳にて已でに六七歳も年長の女子を口説き落したり、是れ即ち翁の妻なり、翁は生前に於て脚本作者として已に非常に持囃されたるものなり。

昔の芝居

翁の頃は、歐羅巴にても、女子が役者となり、舞臺に現はるゝは、蓮葉千萬なる舉動として、世人に許るされず、故に舞臺に於る女役には、美少年を用ゐたるものなり、我國及び支那などと其邊は左して變りなし、又其頃は、今日の如き舞臺の道具立、及び山水樹木の書割などは絶て無かりしもの、由にて、宮殿又は山水の場合には、舞臺の後ろに、大なる貼紙をなし、「此の處、御殿の景色と假定む」とか又は「樹木鬱葱たる場合と假定む」とか大書して、藝を演じたるものなり、之を思へば其頃の歐洲の芝居は、我が今日の能樂の道具立よりも、餘程幼稚なりしならん。

態度

西洋の劇に比すれば、日本の劇は、人物の所作に於て、其の感情を現はす身振りが多く過度なるを免れず、或人は其の原因を人形芝居に發せりと言ひしが、此評當れるに似たり、凡そ人形は、顔色眼付などにて微妙に感情を表はし兼ねる故に、手足

身體を動かすの態度が過度に至らざれば、觀者に感情を與へ兼ねるものにて、眞の人間ならば五寸も足を踏出して宜き場合にも、人形なれば一尺も踏出さざれば觀者の情を動かし難かるべし、我國にて人形芝居は、最も早く發達したる故に其後に興りし普通芝居の役者も模範を人形の態度に取り、或は力み、或は悲しむの姿、總て過度に流れたる場合あるべし、形を動かさずして所謂腹藝を見するなどは、到底人形芝居に望まれぬことにて、人形芝居こそ過度なる態度の起源たりしならん。

繪の人物の態度

普通の芝居に於ける役者の過度なる身振りは、又次第に浮世繪、草艸紙の人物の態度にまで、傳染し來り、遂には日本の總ての繪まで、之にかぶれて人物畫の姿勢は過度に走るもの多きに至れり、同じ東洋ながらも、支那の畫には此弊少なし、日本の浮世繪に限り最も此弊あり、浮世繪以外の本畫も亦た其相伴を免れざるに至る。

雨の上野 (卅六年ノ春)

四月十七日午後、用事ありて、上野池の端に人を訪ふ、時刻ちと早かりければ斯る序でに残りの花をも見ばやと、車を上野公園の方に向く

此日は早朝より雨ふる、「細雨濕衣見不見、閑花落地聞無聲」と云へる如き霏々の雨にはあらずして、花には仇なる降り方なりき、されど風も添はず雨間も多かりき。

三枚橋を過ぎて山内に入り、「兩大師」なる立札の邊に至れば、今迄の來路とは、冷熱の趣を異にし、廣々たる公園も、見渡す限り、往來の人とは纒か算へ得る程にて、ホロ引覆ひたる人力車さへ、稀に一二輛を見るのみ、山下の鐵道馬車邊の賑はひに引換へいと淋し。

と見れば、十日ばかり前には、一面に淡紅の霞たりし花も散失せて左右兩邊の樹木に青き若葉は萌へ出でたり、十餘株の古松の緑りながらも色黒みたる下に、他の樹

木は淺き緑にて其の色にも濃きあり薄きあり、雜樹とは云ひながら大方は楓樹にて、此樹も種類に依り、芽出しの綠色一様ならず、淺深の翠色は滴るばかりに見ゆ、之れのみにて目を引くべき眺めなるに、何時の頃にか植置きけん、八重の晚櫻、其間に點綴して、今を盛りと咲き居たり。

晚櫻は同時に植へ込みたるにや、其の大小種類皆な同様にて右の方、摺鉢山の側に二三株、竹の臺邊にも一二株、東照宮の鳥居を越へて左の方にも二三株あり、天氣どんよりして、晴天に比すれば花の色、いと引立て見ゆる上に、周圍一面の綠樹に掩映し尙一入の眺を増せり。

彼岸櫻は残りなく青葉となりたれども、吉野櫻の梢には行く春の紀念と殘こせし一二片の花の僅に止まり居るも憐れなり、又散果てたる花の紫色なる花蒂は尙ほ其儘に落ちず、若葉は纒二三分も萌したるのみ、故に遠く望めば博物館前より勘工場の邊り數十株が、皆な紫色に見ゆるも情あり。

支那人の詩に「梅紫柳黄」の句あるは梅花落後の花蔀の紫色を賞せしなり、梅に比すれば櫻は花も多ければ其の花蔀に尙ほ更ら一入の趣なからずやは。

斯く、いろくなる眺めの中にも、大佛前の茶屋の籬根に、一叢の山吹が、黄なる色して今を盛りと吹出で、雨に撓み居るところ、特にしほらし。

上野の花と云ふも、古人が植え置たる彼岸櫻は左のみ多からず、都人士が上野の花とて、もてはやす樹は、多く維新後に植へ増たる一重の吉野櫻にこそあれ、今ま咲居る八重櫻も、昔し植たるものとは見えず、若し明治の世に増し植ることなかりせば、上野の櫻も斯く迄にはあらず、余が維新後に間もなく東京に來りし時のことを思へば、今こそ東京は眞に花の都なり、九段邊、江戸川筋、赤阪見附、溜池一帶、さては芝公園東照宮最寄の櫻など、今は花時の名所と算へらるれども、其昔しは、一二株の外はなかりしものなり、其外、此頃、山の手邊の王侯の邸宅に咲出る花は都の錦を織出すも、十の八九は皆維新後のものならぬはなし、軍事、學藝、製造、

教育とも油断なく進歩せしむる我國人は亦た斯く迄にも風流なりけり。

古人が「あだにのみ、過す月日は多けれど花見て暮す春ぞ少なき」と詠せし如く、今歳こそ思ふさま花見をなさんとて、餘念なく立出ることとは、一生に算ふる程もなきものながら、尙ほ忙しき中にも、序であらば花を見んと思ふ人心こそやさしけれ、又或る人が「餘の事は兎も角もして花見かな」と詠せし如く、心の置けぬ友垣四五人打連れて、土曜半日、日曜一日を、一年の憂さ晴しとなすも悪きことにはあらず。

我身も用事ある序でながら、雨中の花見と出掛たるは、未だしもの儲け物なりし、多年東京には住へども、上野に斯るしほらしき雨中の趣ありとは、今迄心付かざりし、此景色を眺むべき適當なる茶亭もあらばと思へど、左るべき處もなく、倦かぬ眺めを其儘にして、用事ある許へと車を返したるは、今尙ほ残り惜く覺ゆ、雨中の上野に斯かる境あるを知らぬ人もやと、其日のことを有の儘に斯くは記るしぬ。

スコットランド 蘇人の冒險

古來、英人は異郷に幸福を求むる冒險者多しと稱せらるゝ中にも、同國の蘇格蘭人は殊に此の性質に富めり、而して又た其の成功者も少からず、茲に最も稀有なる一話あり、頃は千七百三十九年、露土兩國互に兵を構へ、長き戦争の後、遂に講和の場合となり、全權委員として、マーシャル(大將)ケーツは露國方より出で、土耳其方よりも一人のグラランド、ワイザー(内閣大臣)出會して、談判を開き、雙方の全權委員は、目出度く、茲に和議の條約を締結し了て互に禮を爲し會場より退出せんとす。

其時、土國の内閣大臣は突然と露國の大將に近づき、莞爾として其手を握り、忽ち英語を用て語て曰く、「余は今日、我が同國人、殊に同村人たる貴君と、此の名譽ある役目を勤めたるを悦ぶなり」と、大將ケーツは愕然として答る所を知らず、内閣大臣

臣又笑て曰く、余は君の蘇格蘭人なるを知る、何をか隠さん余も亦た實は蘇格蘭人なり、余が幼年にして、キルカルデーの村靈に通ひしとき、常に君の家の傍を過ぎ、君の兄弟と君の童顔とを善く記憶し居れり、怪しむことなかれ將軍、余が家の姓は「ヘルマン」と云へり、斯く言はゞ君も亦た「キルカルデー」に此の一族あるを直に憶起さるべし」と、是に於て、將軍ケーツは今更ら其事の稀有なるに驚きたりと云ふ、此の内閣大臣は即ち蘇人にして遠く異域に遊び土耳其政府に任て遂に宰相の高位に昇りし者にて、一方なる露國の大將ケーツも亦た蘇人が露國に任て此の高官に昇りたるものなり、二強國の代表者たる、敵味方の兩大官が斯く圖らずも蘇人にして而も同村の人なりしとは實に奇談なり。

駱駝

駱駝は、本來寒熱いづれの地帯の産物なるにや、アラビヤ又はエチプト杯の熱帯に

用ひらるゝ所を見れば熱帶動物なるが如く思はるれども、亦た亞細亞の北地支那の邊境に於ては、互寒に堪て十分の役立をなすこと、古より書史にも見え、今日も盛に使用せらるゝ、左すれば、慣習次第にて、寒熱ともに耐ふべき者と見ゆ。

動物中にて、此獸の如く柔順なるは稀れなり、其の徐行するときは極めて遲鈍の様なれども、滿洲人などが偶ま之を駛するを見るに、其の速かなること疾風の如く、如何なる駿馬も追及はざるの勢あり、毛色は通例茶褐色を多しとすれども、時としては、白色の者を見る、但し雪白とはゆかず、稍や灰色を帯ぶ、白色の者は甚だ面白きが故に余は北京に在るとき、近郊に遊ぶときの騎用に供せんと思立ちしことありしが、其の起臥の無器用なるに驚て絶念せり、彼が三折の脚を以て、地上より起ち上るとき、背鞍の動搖、實に甚しく、少し油断せば忽ち振落さるべし、此獸は體の割合には少食にて、御することも容易なり、我國にて車を用ゐる難き地には之を用しても便利なるべく見ゆ、如何の者にや。

支那の象

支那にては、ずっと後世に至り、南北朝の頃も徐州にて大象を獲しことを記載せり、大陸の地なれば野象が南方より山傳ひに來りしこともありしならん。

戦象

印度、小亞細亞、埃及、亞非利加等にては古より象を戦に用ゐること多けれども、左程利益なきのみならず、動もすれば不利を生ぜし例多し、此獸は敵の爲めに前面より傷けらるゝときは、忽ち後ろに引返す性ありと見えいつも後面の味方を蹂躪して之が爲めに總敗軍を惹起こせし例尠からず、唯、班尼拔爾の如き名將は此失なかりしも、其の用ゐたる數は多からず。

班尼拔爾

英雄の成敗は、千古傷心のこと少からずと雖も、東西古今の歴史を通じ、班尼拔爾の事の如く悲しきはあらざるなり。

幼齡九歳の彼れが其父に伴はれて、神の卓前に立ち、國讐なる羅馬を畢生の敵とすべきを誓はしめられたるより其の終焉に至る迄、一念、常に國讐を報するにあらざるものなし、彼れは二十七歳、人生の花とも稱すべき時、大兵を帥て敵國に侵入せしより爾來十六年、苦を兵間に積み、曾て人生室家の樂みを享けたるの跡なし、大功、成るに垂んとして果さず、羅馬の爲に窮追せられて諸邦の朝廷に流寓し、終に毒を仰て斃る、嗚呼人生の慘なる復た此人の如きを見ざるなり。

若し彼をして尋常人ならしめば、亦た深く悲しむに足るものなし、然れども其の用兵の略は優に古今名將の上に出で、外交に敏に、政務に達し、賢を禮し、士に下り、

學を好み、民を愛す、彼は武ありて文なき粗暴家にあらず、文有て武なき文弱人にあらず、人格上、一點非議すべき所なく大功幾んど成るに垂んとして此の不幸を見る、是れ特に人をして傷心に勝ざらしむる所以なり。

地中海を隔て、南北に對峙するものは、羅馬、哥兒撒地の二共和國なり、天は二國の兩立を許るさず彼れ滅びずんば此れ興らず、彼れ衰えずんば此れ盛ならず、羅馬は戰鬪を事とする尙武の民なり、哥人は貿易を主とする平和の民なり、哥人をして羅馬と戰はしむるは羊を驅て狼に向ふが如し、況んや班尼拔爾の事に當りしは、既に其國が一たび痛撃を受けたるの後なるをや、本國人の頼むに足らざるを知り、乃父の遺志を繼で兵を屬領に募り、之を以て強敵に當らんとす、事固とより已に非なり、彼れ豈に之を知らざらんや、知て而して此に出る、亦た實に勢の已むを得ざるものあればなり。

彼が志を決して西班牙を發するに臨み、其兵幾んど十萬と號す、然れどもヒラネ

スの峻嶺を超へ、アルプスの難路を過ぎ了りしとき其兵、已に四分の一を減ず、彼
 が羅馬の北野に進みしときは、見兵僅に二萬五千に過ぎざるなり、途上にて、將士
 の怨嗟を聞くや、彼れは寛大にも軍中に令して曰く、「去らんと欲する者は去れ、從
 ふことを樂む者は來れ」と、此時に當り將軍を棄んとする者八千人なりしと雖も、
 尙ほ二萬餘の兵は死生を共にせんことを誓へり、而して其兵は西班牙及びゴール北
 部諸種の蠻族より組成せしものゝみ、決して夫の愛國心燃るが如き羅馬兵の比にあ
 らざるなり、蕪雜混合せる此兵に對し恩威の大なるものあらざるよりは、焉ぞ能く斯
 の如くなるを得んや、古今偉功を奏せし將帥を見るに其の兵士は多く統一せる國民
 にして、愛國心あるものに非るはなし、唯夫れ班尼拔爾に至ては、即ち然らず、其
 の將士は其の將軍に對して單に恩威を感じるのみ、大切なる愛國の要素を缺く、此
 の異様の兵を以て、夫の將來、印度以西を統一すべきの運命を荷へる勇壯絶倫愛國
 無雙の羅馬人に對敵し一たびは幾んと之を壓服せんとす、嗚呼、此人の外、千古復

た此人なきなり。

獨り人品のみならず、其の戰鬪に長ずる亦た古今無雙、亞歷山、普烈力、那破翁と
 雖も其上に出るを得ず、是れ余の私評にあらず亦歐洲史家の通論なり。
 我兵と敵兵と、強弱勇怯、既に懸絶するのみならず、敵は毎ねに大兵にして、我は
 毎ねに寡兵なり、然るに尙ほ、奇戰には謀略を用ひ、正戰には戰術を用ゆ、有名な
 カンネの大戦を見よ、彼れの兵數は敵軍の半にも當らざりしにあらずや、而かも
 堂々たる正戰に於て、彼れは巧妙なる戰術を用ひ、敵軍をして七萬の死屍を戰地に
 遺して潰敗せしめたり、斯の如き全勝大敗は歴史中、實に稀有の事とす、戰地に斃
 れたる羅馬貴族の指より集めたる金の指環數斛を彼れの使が本國に齎らし歸て之を
 國會に示せしとき、其の國人の驚喜は幾何なりしぞや、此の大勝に乗じて、直に羅
 馬を衝かざりしは、後人の憾む所なりと雖も、其兵や本と甚だ多からず加るに戰後
 の疲憊を以てす、此の危道を行かざるも、一方にて伊太利南部の城邑は皆な遙に歎

を送るの勢あり、彼を捨て此を取る。亦た理なしとせんや、此戦の夕、一部將が「我に二千の騎兵を與へよ、將軍の爲に直に羅馬を衝き、二日を出でずして將軍を羅馬の城中に晩食せしめん」と獻策せし時、彼れ亦た既に其の得失を知る、必ずしも後人の批議を俟たざるなり。

彼れの國人は、必要大切の場合にも、曾て十分の援兵を彼れに送りしことなし、十分の金穀を彼れに與へしことなし、是れ彼れが十六年間、敵國を蹂躪しながら、遂に其の成功を誤りし大原因なり、彼れの成功を最後に失ひしは、本國人民の罪にして彼れの罪にあらず。

斯の如くして彼れは十六年間、自ら兵を他國に募て其の缺員を補ふのみならず、其の金穀も亦た常に之を敵國に取れり、其忍耐の大なる亦其の智略と並行す。

彼れは善く戦へり、彼れは巧に外交を操縦せり、然れども其の本國は却て敵の侵入を防ぎ得ず、勢の救ふ可からざるに及んで、彼れを召喚して之に當らしむ、嗚呼亦

た遅し、彼れの智勇も之を如何ともする能はず、而も尙ほ此の存亡の秋に在て、敵と媾和の約を結び、國人をして小安を得せしめ、一方には財政を釐革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國帑の急を緩め、莫大なる償金を年々支辨し得るの途を畫策せり、彼れ豈尋常一武將ならんや、彼をして平世に出でしめば、亦治平の良宰相たらん。

其の未だ本國に召喚されずして、羅馬の野に轉戦するや、兵寡く食竭く、回復の望は單に懸けて其の實弟ハスダラルが西班牙より援軍を率て來り合するに在りしなり、然るに天は衰邦に祚せず、彼れの弟は伊太利の北野に敗られ、彼れが手を握て久別の喜びを叙せんと樂みたる其人の首級は、敵の槍鋒に貫かれて遙に我が營前に現はれたり、嗚呼人生悲酸のこと多しと雖も、未だ此人の此時の如きものはあらざるなり。

彼れが遙に弟の首級を望みしとき「我れ今まカルテーチの運命を知れり」と歎せし

一言は、如何に無限の悲痛を含みしぞ、尋常骨肉の情よりするも、尙ほ忍ぶ能はず、況んや自國の興亡は、此の援軍の勝敗に懸れるをや、史を讀で是に至り、卷を捲ふて長嘆せざる者、果して幾人かある、「出帥未挺身先死」の五丈原頭の武侯、赤心報國の隸文を露らして餘杭の市に斬られたる岳武穆も亦た何ぞ比するに足らん。彼れの戰略戰術が人目を眩耀するが爲めに、人或は其の名將たるを知て其の人格を察せず、若し能く之を究めば其の不幸を悲しむの情、轉た深きを加ふべし、千古傷心の事、實に此人の如きはあらざるなり。

今宵もや

「小筵に、ころも片敷き、今宵もや、われを待つらん、宇治の玉姫」(通例は橋姫とす)の歌は如何にも餘意あるを覺ゆ、扱て其の意味を考ふれば「寢道具を設けて情婦が我を待つらん」との心に過ぎずして、一點も紆餘曲折の妙ありとは覺えず、然るも

尙ほ打吟するほど非常に餘意あり、依てつくづく考ふるに、此歌の中なる「こよひもや」の「もや」なる言葉に無限の意味ありて斯く人を感せしむるに似たり已に「今宵もや」と云ふ、是まで數度相ひ逢ふを知るに足る、而して又確と約せしにはあらねども我を待ち居るならんとの意も籠もれり、凡そ詩歌には斯く僅かなる處に面白味あるも奇なり。

誤傳

後人の或人を詠せし詩歌が往々後世に本人の作と誤傳せらるゝもの少からず、十年西南の亂後に老西郷の作として人口に膾炙する「吾劔已折吾馬斃、秋風埋骨故郷山」とか云へる一絶も其實は或人が西郷を詠せしものなり、四五年前、余は此詩の作者に向ひ、其の虚實を質せしに、其人微笑し「先づ西郷の作として置く方宜からん」と答へたり、「高き屋にのぼりて見れば」の歌も仁徳帝の御製にはあらで後人が帝を

詠せしものたると同様なりし

將門

古の武將武士は皆な相應に歌道の心掛ありしものと見え、此人は、よも歌など詠むまじと見ゆるものすら詠歌あり、將門の如きも其類なり、此人が貞盛の妻の囚はれを赦るせしとき衣服を興へ歌を添へて遣はしたりと云ふ其歌に

夜にても風のたよりに我ぞ訪ふ

枝はなれたる花のやどりを

亂離の際、夫に別れたる婦人を、枝に放れたる花に擬し、斯る戦亂の時にも我は親族の女子を等閑にせずとの心にて、「夜にても風の便りに我ぞ訪ふ」と詠みしならん。

孔雀の羽

孔雀の羽は美麗にて愛すべきものながら、西洋、殊に英國にては、之を忌む者あり「此の羽を家に飾り置けば、家内に病人出づる」との迷信より起れり。

其の爲めにや、駝鳥其の他の鳥毛をば帽子などの飾りに多く用ゆること多きに、孔雀の羽を用ゆること甚だ稀なり、尤も、希臘の古神の中には、孔雀を伴ひ居る者もあれども、上記の迷信は、歐洲にて中世より始まりしものにて、其の原因は回教より來りしと云へる説あり、回教人中には、孔雀が地獄の扉を開きしとの言傳へあるより此の鳥は回教人に悦ばれず此の風が自然と歐洲にも傳はり遂には耶蘇教人までも、之を忌むに至りしならん、故に美術品等を、我國より歐洲に輸出する商人は、之を知り居るも、一の心得なるべし。

歐洲人も、随分に縁喜を氣に懸くる者多し、馬蹄の鐵沓を拾へば吉事あり、又は運が善しとて、大に之を悦ぶこと、今も尙ほ然り、故に襟の飾針、又は手釦、或は寫眞挾、其の他室内の飾りに、蹄鐵の形を用ゆるもの多きは之が爲めなり。

蹄鐵

鳩の羽

又歐洲にては、鳩をば忌まざれども、鳩の羽には迷信あり、人の知る如く、西洋枕には澤山に鳥の羽を充たし入れて、之をブク／＼せしむるものなるが、危篤の病人、臨終に近寄る時は、羽枕を取り去て他物を之に代ゆることあり右は、鳩の羽を枕にする時は死人の苦痛を増すと云へる言傳へあるため、羽枕の中に、鳩の羽が交り居るを恐るゝに因るなり。

小鳥の飼方

支那人は邦人歐米人に比すれば、小鳥の飼方は頗る巧なり、歐洲人は殊に拙なり、英國杯の動物園にて、目白を飼ふに、米の飯粒を用居れり、故に鳥は皆な弱りて見ゆ、支那人は是等のことには頗る巧者にて、大抵の鳥は之を運動せしむるため、籠の儘、又は木の小枝に据たる儘に携へて一日に市街を一里位は持ち歩くを常とす、斯くすれば、嘯り方頗る善く、健康にも宜しきよし、我國等には絶てなきことなり。

北京にて、人の最も多く愛するは、我國にて豆廻と唱る小鳥なり、其の姿、及び毛色とも一切、文鳥に同じく、只其の異なる所は二割が大にして且つ頬なる紅色の薄きのみ、此の鳥を拳に据え、又は小枝に止らせ、往來を運動し居る者頗る夥し、右は鳴聲を愛するよりも、其の人に馴れ親むを貴ぶなり、之を手より放つこと恰も

鷹を放つが如くする時は、空中に翱翔して、稍や久しき後、再び主人の拳に立戻る、尙ほ其の巧みなるものは、一たび拳より空中に翔るや、飼主は小指の尖程なる小木丸を空中に擲つ、其の瞬間に鳥は隙さず宙にて之を嘴み、再び飼主の手に飛び歸る、技の拙なるものは此の丸を嘴み得ずして地に落すものあり、此の技を競争する爲めに、晴日には廣場に數十人集り、鳥を放ち居る者多し、誠に愛らしき遊なり、但し彼地にて此等の鳥を愛養するは、中以下の人民に限り、士大夫には尠し。

畫眉鳥

北京にて鳴聲を愛翫し、最も珍重するは畫眉鳥及び告天子等なり、畫眉鳥は、何故か我國には多く舶來し居らざるやうなるが、其の轉り聲、極めて高く、勇しきものにて、予々彼地に在る時、之を飼はんとせしに、前に記する如く少なくとも一日に一里位は、之を携へ、運動せしむるにあらざれば、鳴が止ると云ふ故、見合せたり、

畫眉鳥と名くるは、我國の「頬白」の如く、眼の縁に眉に似たる黒き色彩あるが故なり。

北京にて飼ふ雲雀の形は總て我國のものと同じけれども、其の大き一倍ありて、胸邊の黒色、其他の色彩、一層鮮明なり、從て轉る聲も亦た大なり、此の鳥は時どして我國の鳥屋にも舶來し居るものを見掛く。

其他、連雀などを拳に据え、又は小枝に止らせ、能く馴れ居る者多し、總じて小鳥の飼方は邦人よりも頗る巧みなり。

梅

梅は、寒中に花を着るほど故、寒氣に堪ゆべき樹なりと思ふ者あれども、實は然らず、北京などにては、寒中に枯死するがため、絶て此の木なし、但し桃、海棠の類は梅よりも強しと見え、彼地にも之を見る。

同地にて、正月は梅を愛すれども、右の次第故に、盆栽にて之を飾る植木屋は正月を當込みに、暖室にて梅の盆栽を非常に仕入れ賣捌くなり、又た臘梅の盆栽も、梅と共に正月には珍重せらる、故に植木屋は南方より取寄せ、盛に之を仕立つ、其の木振り甚だこせて、我國盆栽家の垂涎すべきもの多し、若し持歸り得べきならばと思ひしともありき。

楊梅

本邦に見掛けずして、北京にて初めて見たるは、楊梅なり、其の花は、我が紅梅の花を八重にしたるものに類し、又た小梅の花を八重にしたるものにも類す、木は甚だ大ならず、桃と同じ頃に花を開く、さして趣なきものなれども、花に乏し彼地にては、亦た愛すべし。
北京などにて、桃、海棠を愛すれども、花の盛り甚だ短し、是れ其の地の北に偏

して寒暑の氣候の變遷甚だ速かなるが故なり、我國などの如く、輕寒薄暖なる春秋の如き氣候の時間は頗る短く、寒が過るかと思へば忽ち暑に遷り、花も亦た之が爲に開落の速かなること非常なり、例せば桃花の如きも、苔より開き、開くより落るに至る、僅か一兩日の間のみ、諺に云ふ「三日見ぬ間の櫻哉」の比にあらず、故に未だ一兩日はと思ひ居る中に直に散り初む。
梅は前記する如く北地に適せざるが故に南方なる杭州の西湖邊には最も適當にて此地には早梅多し、林和靖が梅を愛せしと云ふも、即ち此の處にて、湖中の島なる孤山は、則ち和靖の舊居なり、故に探梅など、云へるは、江南のことにて、北京などには思ひも寄らず。

柳絮

又支那にて邦人に珍しきは柳絮なり、桃花の開く頃に、之を見る、所謂「柳絮飛

時花滿城」の句の如し、少しく風ある日には、庭前柳樹の下に、白きこと綿の如く、ふわ／＼と見ゆる、大小の手鞠の轉がり居るを見る、是れ柳絮の相合したるもの、夫の雪中に雪團を轉がす如き理にて、手鞠の如くなりしなり、元と絮は一寸位の菊花様のものにて、中央に小核あり、核に毛が附着し居るなり、其毛は尾花の毛の如し、又我國の蒲公英の實に類す、蓋し柳花の實にて、花にはあるまじ、其の風に飛散する處、極めて軽く、薄綿に似たり、詩人が轉々飄泊の形容に飛絮と稱するも頗る當れり、晴朗の頃、柳樹の多き地に到れば風に隨て飛散する紛々として雪花に似たり、馬に騎し、近郊に出で、此の景に遇ふ時は、坐ろに人をして

柳條折盡花飛盡

借問行人歸不歸

の句など想起し、懷郷の情に堪えざらしむ。

絮の用

木綿の支那に入りしは、ズツと後世のことにて、木綿なき時代には、柳絮を綿の如く用ひたる場合多きなり、夫の韓信の饑を慰むで食を與へし漂母と云へるも、即ち柳絮を水に晒らし居りたる婆さんなり、我國の畫工などが、反物を洗濯する老婆に描くは是非もなきことながら誤れり、木綿なき時代には衣服の綿入に用ゐたる綿は、真綿か柳絮の二種のみなりしなり。

大阪陣

博覽會見物の爲め大阪に至り、遙かに大阪陣のことなど懷へば感慨なきにしもあらず。關ヶ原の役以來、天下の大勢は既に定まる、爾來十餘年を経る上は、猶更ら其の勢は益々堅く最早や一朝にして動すべからず、故に關ヶ原以後豊臣氏の爲めに計れば、蓋し二策ありしのみ、其の一は家康既に七十の頽齡なるが故に、其の死を俟て事を

擧げ、徳川氏と戦を決するなり、其二は豊臣の祀を存するを專一とし、徳川氏の臣
 下に準じ、諸大名の土に列して客分ともなり、大阪の城を去て然るべき地に巨封を
 受け、平和の處置に出るなり、此の第二策は頗る安全にして且行ひ得べきなり第一
 策は其事頗る難し、何となれば、人の智力は大抵同様なるものにて、豊臣氏の爲さ
 んと欲する所のものは、徳川氏も亦た之を知ればなり、況や家康の明に於ておや、
 然るを清正、且元の如き豊臣恩顧の諸將の圖りし所は却て他の第一策に在りしが如
 し、且元が大阪を退きしとき、其の知人に述べ懐し、「家康の齡も既に傾けり、今暫く
 恐で徳川に屈し、秀頼をして江戸に往來せしめ家康の死を俟て事を舉んとは、故主
 計頭とも申合たることなり」と云し如きを見ても彼等は本來第一策に出でんとせし
 なり、又福島正則が秀頼の事を擧る時の使者に對し、「三年遅く三年早かりし、今は
 是非なし」とて之を謝絶せし如きも其胸中に家康の壽は三年を保たずと見込たるな
 らん、福島すら猶然り、徳川方にて本多佐渡を始め其他の謀臣此心を知らざる者あ

らんや、右は正則等の爾か思ふのみならず、局外の世人すら尙ほ之を察し居りしは

左の一事にても明白なり。

大阪陣より以前に家康、京師に在りし時、種々の落首を爲すもの多し、板倉伊賀守
 之を禁せんとせしに、家康笑て従はず、其の落首を皆な持來れとて見たる中に

御所柿は獨り熟して落にけり

木の下に居て拾ふ秀頼

と云へるあり、當時家康の事を大御所と云ひし故に、御所柿と詠しなり、是等は明
 に家康歿後のことを想像せしものにて之を見たる本人家康は如何なる感じを起せし
 なるべきか、徳川氏の利は、大阪に迫て早く事を舉しむるにあり、此時に於て嘗て
 清正等の畫策せし表面順從の策に徳川氏が欺かるべきものならんや、故に早く心を
 決して土記せる第二策に出たる方、豊臣氏を存する爲めには良策なりしならん、然
 れども淀君の氣質、其他大阪城中の人々に在ては、迎も忍び得べからざることなり、

是亦た是非もなき成行のみ。
 若し秀頼をして江戸に往來せしめ、大阪を去て其封を遠地に轉せしめば、家康の性質として必ずしも之を容れざるにあらず、豊太閤の舊誼を思ひて其の子孫をば優遇し兼まじき人物なり、然し第二策は豊臣氏を慮ること清正の如きすら尙ほ決心するに忍びざりしものと見ゆ。

大阪陣に於る人物は眞田、木村、後藤、塙なり、其中に後藤と塙とは功名の士なり、木村長門守は節義の人なり、眞田は半ば功名、半ば節義の人。

後藤、塙の大阪に於る、何等の情誼あるにもあらず、事の成敗も略ぼ之を知らざるにあらず、只だ一生の思出に天下の大兵を引受け芳を後世に貽さんとの功名心に出たるのみ、眞田は關ヶ原以來の成行きにて、武士の意地もあり、獨り功名の爲のみにはあらざるなり、木村に至ては、純然たる節義。

後藤又兵衛

後藤又兵衛と云へば、後世芝居などにも仕組まれ、大酒飲みの如く思はるれども此人は實際は下戸にて酒は飲ぬ方なり、然し身體偉大の大男なり、討死の時は六十前後と見ゆ、其の武邊武功に加るに膽勇を以てす亦た得難きの材なれども、此人に惜む所は、餘り讀書なしと見え、從來の去就進退、稱譽の値なし、其の黒田家を去りしも古主長政と武功を競ひしに由る、孝高には一目、置きたれども、長政に對しては然らず、長政も當時屈指の大將ながら後藤を容るゝ量なく、常に之と競んとせしは惜むべし、人を容るゝは大將に必要の事なり、長政其心懸けなきために此人を失へり、後藤の大阪陣は、果して後藤の名を後昆に傳へたれば、當人には本望ならん。

塙直次

塙團右衛門は、武骨一片の男と思ふ者あれども、折々は詩作などあり、此人が加藤家を去りし時に

遂不留江南野水

高飛天地一閑鷗

の句を題せしが如き又鐵牛と號して大龍和尚に隨ひ居るとき、一日招待の席に遅れたりとて

一鞭遲到勿肯怒

君駕大龍我鐵牛

と戯に口吟せし如き當時の武人には珍しき心懸なり、然るに日頃の去就進退、當を失するものあるは惜むべし、此人も大阪方に加はりたればこそ、今日迄も永く人をして塙直次の名を記憶せしむ、然らずんば陪臣にて朽果てたるならん。

真田幸村

真田の人物は申分なし、其の進退出處より最期に至るまで、流石は父の子と稱すべし、

し、冬陣夏陣の時とも、一切の舉動、從容として迫らず、後人をして欽慕せしむるに足る、大阪方の夏陣の軍議に此人が「秀頼を擁して京師に入り、天子を奉じて天下に號令せん、斯くて敗るゝも尚ほ豊臣氏の面目を後世に保つに足る」と獻策せしなど、尋常一武人の見にあらず、其の人物に大なる所あり、後藤、塙等に比すれば數等を抜く。

木村長門守

木村の戦死は二十三歳なり惜むべし、戦ひ止みて家康秀忠及び本多、佐渡等が涙を濺ぎしは此人に在り、其の徳川氏の招きを拒みし所、冬陣に和議の契約書を取換せし時の始末、及び戦死の時も頭髮に香を焼き込みし所、又美男子にして婦人に懸想せられしなど、宛然、小説中の人物なり其傳を靈妙の筆にて記するならば一廉の讀物ならん之を思ひ立つ人もなきにや。

誤用し易き語

近來談話などに用る辭にて往々、誤り居る者少からず、吾々も其昔し、先輩のために直されたることあり、心得なき人々のために其の一二を述べ置かん。最も多く誤らるゝは「必」の字の使ひ別けなり「必ず」は「屹度」と云へる意味にて之れは紛れもなきことなれども「必や」及び「必しも」の二語に至ては十中の七八までは間違居るやうなり。

必や

「必や」は「必ず」とは非常に相違ある意味にて「必や」と云へば其語尾に必ず疑を挾む所の「か」と云ふ言葉を附くべきものなり「十二時には面會出來ぬが面會し得るとすれば「必ずや四時頃ならんか」と云へる如く其の語尾に「か」云へる疑の言葉を挾むべ

きなり、例せば「訴を聞くことは他人に優ることなけれども、若し何等かの方法あらば、訴を起さしめぬやうにもなし得べきか」と云へる如き場合に「必や訴なからしめんか」となる、又一例「君子をば到底求め得ずとして、何等か好む所の人物ありとすれば、先づ狂狷者でも取らうかと云へる場合に「必や狂狷か」と爲る然るを「必ず」(屹度)の意味に用るは誤れり、本来「必や」なる語は最も使ひ悪きものなり、談話などには適當の場合少なし、之を避くるを可とす。

必しも

其次には「必しも」なり此の言葉には、其の語尾に「必ずしも……せぬ」又は「……でない」と云へる如く打消の辭を附くべきなり、例せば「一概に急ぎはせず」と云へる時に「必しも急がず」と用るが如し、又「一概にあの人が必要でもなし」と云へる如き場合には「必しも彼人を要せず」と用る得べし、然るを「必しも……なり」又は「必

しも……致します」の如く用る時は意味通せぬこととなる、故に「必しも」の語尾には必ず打消の語の來るべきものと思ふべし、「必ず」と同意味に用ゆ可らず、何れにも談話の際には餘り漢語を使ぬ方宜し、洋語の如きも成るべく避る方、温和しく見えてよし。

蝟

蝟は、我國にては殆ど見掛ざるものなるが、支那北地には非常に多し、大さ通例の鼠に二倍し、色も鼠に類す、尾は短くして無きが如し、夜陰ならざれば出て食を求めず、北京近郊を月夜に歩行すれば、畑地の間に頗る多し、人杯の來り近づくを知る時は、逃れ去らずして停歩し直に身を縮めて、手鞠の如くなり、全身の毛を逆立てること毬栗に似たり、其毛は豪猪の毛と同じく尖りて堅し、自衛のためには工合善く出來居れり、邦人には一寸珍しく覺ゆ、但し一種の臭氣あり、人の來るを見れば走り去らずして斯く身を縮め居るが故に之を捕ふことは容易なり。

蜘蛛

又支那北地には、人を螫す一種の蜘蛛あり、其形甚だ小にして、我が蠅虎に過ぎず、色は茶褐色に赤味の勝ちたるものなり、余は一日何物にか螫れしが、其螫口を見るに床蟲にもあらず、不思議に思ひしが故に、直に衣を解き検めしめしに、此蜘蛛を見出せり、依て人に聞けば、人を螫し血を吸ふ種類なりと云ふ、邦人の往々之に螫るゝもの多し、彼地に赴く人は注意すべし。

漢字

或る時、讀書家、俗人とも五六人打交り雑談せしに、一人あり支那文字の説を出し、支那の字は三種の意味より出づ、第一は物の形に取り、第二は其形を利用して

意味より作り、第三は音通を以て之を作る、故に「日」の字「月」の字は、古篆にて日の形と月の形をなし居れり、是れ則ち形より出でしなり、又、月と日との二字を合して「明」の字を作りしは日月の光と云へる意味に取りしなり、此二種の字の生ぜし上にて更に音を以て作り出せしものもあり、故に大抵の字は其形を見て其意を知るべし、「内」の字は口の中に入の字ある故、則ち内なり、「宀」の中に豕の居るは則ち「家」なり、山を二つ超るは、家に居らざること明なり、故に之を「出」と云ふ。然らば、車の字は如何ん、車の形に似たる處なきにあらすや」と問へば、否な、車の字は古篆に於て元と横に斛と書きしものなり、則ち車を正面より見たる所にて左の字は、車輪なり、中に在るは車の函にて、横に貫き居るは車の軸なり」と答へたり。

又「目」の字は目の形「口」の字は口の開いた形なり「耳」の字は耳タブの形なり、皆斯の如しと説きしに、一俗人、難じて曰く「鼻の字は如何ん」と答辯者も之には一寸と

閉口せり、如何にも此字だけは鼻の形に成り居らざるやうなり、(蓋し意味より出でしものならん)。

昔し宋の學者連が打寄り雑談せしとき、滔々と字義を説きし人ありて「波」は水の皮と云へる意味なりと云ひしに、之を難する者、「左れば『滑』は水の骨なるや」と問はれて困りしと云へる話あれども、骨を水に浸したるものは餘計にヌルヌルとする故に滑の義には協へり、苟くも漢字に於て其形も其意味何等かの出所なきものなしと説き出したるに、他の一人感歎して曰く、「腋」は是れ夜の肉「掖」は是れ夜の手、實に妙なり」と一座絶倒す。

峻 德

巧利一方に趨る如く見へながらも歐人中には實に峻嚴なる徳義を以て人を感動せしむる例多し、ドクトル、レツンム氏の如き是なり、氏は其父の死せし時、相應の遺

産を受取りしが其重なるものは、ジャマイカの殖民地に蓄へし多数の奴隸なりしなり(奴隸は、一生買切の奉公人にて、賣買し得るものなれば、一人前に相應の價あるものと知るべし)斯くて己れ身代を引受けたる後、西印度に赴き其の遺産を見廻りしに、自由を失ひたる奴隸等の有様を見るに及んで、こは、人類の財産となすべきものにあらずとの感を生じ、直に無代價を以て彼等を解放し、彼等を自由の民と爲せり、是に於てか、氏の財産は、一朝にして烏有に歸し、殆ど赤裸々の身とは爲れり、是れ實に氏が二十三歳の時なりき、氏は斯く無財産の身となりし後、トルトラに赴き、醫術を開業して、相應の財産を作り、英國に歸りしが、猶ほ次第に富を作り、終にマアガレットに於て、海客入浴院と云る一種の仕組を組立て、又大なる一の施薬院を設立して、深く世に仁惠を施したり。

良 醫 の 心 得

醫家の話に就て想起せるは、世上にて、病人の貧富に因り醫者が之を取扱ふに差別あるを非難するもの多けれども、名醫ほど、其心掛は良きものなり、昔し佛國に於る有名なる外科醫ボードン氏は、其頃大流行の醫家なりしが、同國の宰相ボアス氏嘗て腫物を愛へ、氏を招きて治療を乞ふ、其時宰相はボードン氏に向ひ「何卒ぞ丁寧に取り扱ひ呉よ、君の病院に於る貧乏患者と同一に視る勿れ」と語りしに、氏は之を聞くや、儼然として容を正し「閣下、余の病院に於て貧しき患者も、余の目には皆な佛國の宰相と見ゆるなり」と答たるに、流石の宰相も赧然として赤面せりと云ふ。

實 名 の 音 讀

幼時に、女子の百人首を誦するを聞くに、作者の名を通例は訓讀みと爲すに、其の間、音讀みと爲すあり、例せば正三位家隆の如し、「イエタカ」と讀まずして「カリユツ」と讀む、當時其故を知らず、心に之を疑ひしが、後ちに至り、右の如く音讀

と爲すは後世の作意にあらで、昔しよりの讀慣はしなるを知れり、家隆の如きは、實に其人の在世の頃より斯く讀み來りしものなり、右にて察するに、定家の「テイカ」、行成の「ギヨウゼイ」も大抵は其人の頃よりの唱來りならん。

其頃は、上流の人物の名を、わざと唐様に呼ぶこと一種の流行たりしなり、而して中流以下の名を唐様に唱るは、分を知らざる僭越の事と見做し、音讀みは、上流人に限りたる如し。

満仲の「マンヂウ」、頼光の「ライコウ」等、皆な當時の唱を、後世まで其儘に傳へ來りしにて、此の二將の頃が、恰も音讀み流行の時代なりしなり。

著聞集なりしと覺ゆ、家隆卿を、其子の名親に頼まんとする公家ありしとき、此家に仕る田舎武士が、若殿の名は「イエタカ」と爲し玉ふべしと云ひしとの笑話あり、蓋し其頃世人が家隆卿の事を「カリユウ」と唱へしが故に、此の武士は「イエタカ」と知らざりしなり、右にて思ひ合はするに、當時の人名にして今日迄、音讀みに傳は

りしものは、皆大抵、其頃よりの唱來りなり。

百人首の假名附の本を見るに、實名の音讀なるは俊成、家隆の二人のみ、而していづれも皆、當時著名の人物に限る、家隆なども、歌道にては其頃の人麿と評せられしものにて、又八十近き高齡を保ちたり。

三 絶

余嘗て曰く、西洋の理學、印度の哲學、支那の文學は、世界の三絶なりと、三者の世に必要なるは言ふまでも無けれど、哲學の弊は印度を虛無厭世の氣風に陥れ文學の弊は支那を輕薄浮華に陥る、亦た是非もなき事共なり。

黄巢の菊花

支那にては士大夫が皆な斯く詩人たるのみならず、鷄鳴狗盜の雄に至る迄も亦た詩

を能くする者多し、黄巢が唐の天下を覆へせし張本人たるは、讀書家の知る所此者を尋常一様の草賊と思ふ人ある様なれども、其實は多少の才學あり、畢竟は文官試験に落第し身を立つるの地なきより、遂に大亂を醸せしのみ、同人が嘗て九月の菊花を詠せし句に曰く

衝天香陣透長安

滿城盡戴黃金甲

と又曰く

他年我若爲青帝

報與桃花一處開

と其の口氣、既に人を凌ぐの概あり、在上の人、若し能く容用せば亦た役に立つべき人物たりしならん。

張元の雪

又宋の盛時に、韓琦、范仲淹、等が事を用るし頃、宋の西邊を擾り苦しめたるは夏

王の趙元昊なり、而て其の謀臣たりし張元は、支那本部より走て夏に投せし者なり、此人も亦た下第して志を得ず、詩を以て范、韓、二公を干かし、用ゐられざりし爲め、遂に西戎に走りしなり、其の雪を詠せし詩に曰く

戰退玉龍三百萬

敗殘鱗甲滿天飛

と又、鷹を詠せし句に曰く

有心待翊月中兔

更向白雲頭上飛

と雄抜の氣、自ら口吻に現はる。

秦檜の注意

秦檜は後世の憎まれ者なるが、永く相位に在て身を全くせし迹を案するに、萬事非常に注意行届きたるやうなり、嘗て一士人あり、宰相秦檜の添書を偽造して、或る府知事に採用を求めたるに、知事は添書の偽を發見し、直に秦檜に移書して、此人

を罪せむと請ひしに、檜は却て其の士人に一官を授けしめたり、知事怪で之を問ひしに、檜の曰く、宰相の添書を偽造する程の人物ならば、其の大膽不敵なること知るべし、若し之を放たば、北のかた敵國に奔るか、然らざれば亂を草澤に生じ兼ねまじ、一官何を客むに足らむ」と、斯くまで注意周密の點は、却て范韓二公の上に出づ、彼れが朝野の憎みを受けながら、十數年相位に立ち其身を全くし得たるは平生の心掛が、人に過ぎたるものあるに因るならん。

鶴樓松

勅命にて庭の梅樹を持去られむとせし時

勅なれはいともかしこし鶯の

宿はと問はゞいかゞ答へん

と詠みしに、梅を其儘に据置かれたりとの鶯宿梅の物語は、人の知るところなるが、

支那にて明の頃、或縣にて廳舎を新築せむとせしに、其の棟梁に供ふべき一大古松を近傍の山に發見せり、然るに一隱者あり、樹下に草廬を結び居たり、最早や二三日の中には我が愛樹を伐取られむと聞き、松樹を削り一首を題して曰く

大夫去作棟梁材

無復清陰覆綠苔

今夜明月風露冷

誤他雲外鶴歸來

と、知事其詩を見、悵然として樹を伐ることを見合せしめたりと、是は鶴樓松とも名くべきか。

戀歌

日本の國詩は昔より題詠も多きことなるが、吾々の目には、國詩の粹は戀歌に在るが如し、戀歌の類だけは、漢洋の詩に匹するに足るのみならず、時としては却て之を凌ぐに足るものあるを見る、併し古來の歌集にある戀歌は、必ずしも其人が其境

を實驗せしにもあらず、想像より詠出しながら、敬服すべきものあり。例せば
はかなくて夢にも人を見つる夜は

朝の床こそ起き憂かりける

の如き、之を一讀せば、官女、若くは長袖者流の作とこそ思ふべきに、其實は僧侶
(大僧正慈圓と覺ゆ)の作ならむとは意外なり、但し吾々の愛玩する者は巧に事を言
廻せし者よりも、境の眞にして情の切なる方に多し夫の樂翁公の

心あてに見し夕顔の花ちりて

尋ねぞわぶる黄昏の宿

の如き、優なるは則ち優なり、巧なるは則ち巧なり、然れども、實際、花が散りし
とて宿を見失ふ程にもあるまじ、又

心あてに折らばや折らむ初霜の

置き惑はせる白菊の花

の如き、巧は則ち巧なり、然れども、霜の爲に白くなりしとて、菊の花を折りまど
ふ程にもあるまじ、是等は唯だ構思の巧を稱するに止まるのみ。

俗歌

耳慣れたる俗歌の平々凡々なるものにて、其情、人を動かす者あり。

おまへ百迄、わしや九十九迄、共にしらがのはゆるまで

の如き、多分女子の情を述べたるものならむが、二人共に百迄と言はずして、自分
だけ、一年を減じ、九十九とせし、心根のやさしさは如何ん、尙ほ夫の

とふの管こも、七ふの上に、ぬしを寝させて、此身は三ふに

云々と言へるの類なり、譯も分らず、誤も多き歌ながら、女子の情として何事をも
一步を男子に譲る所、亦たしほらしきにあらずや。

情の濃なる者

最も俗なるものの中にても

異見する人、なに憎くからう、かわいお方の親ぢやもの

の如き、西洋杯にても親々の許るさぬ女子と結約するを見て父母が異見を子に加る場合は少からず、左る場合にも、之れほどの情の濃なる歌は見當らず女子より云へば男子を愛するの餘は、「我を遠けよ」と意見する人さえも、なつかしく思ふとは、情の切なる極なり、「君子は愛、屋上の鳥に及ぶ」と云ふ、其人をかわけく思ふ餘りは、屋根に居る鳥までも、なつかしと思ふは人情の常なるべし、況んや其人の父母をや。

誤字

俗曲の中には佳き歌は極めて少くなし、又た偶々之れありても、譯も知らぬ兒女の爲に、唄ひくづされて、意味を損じ居るもの多し、「嘗て宴席にて

花が蝶々か、蝶々が花か、来てはちら〜まよはせる

の歌を聞く、如何にも意味を解しかねたり、後ち不斗心付きたるに、こは佳き歌なり蓋し作者の意は、元と

花歟蝶々歟、蝶々歟花歟、来てはちらちら迷はせる

とこそせしならむ、然るを「花が蝶々か蝶々が花か」と「か」を「が」と濁らされし爲め、當初の意味は全く没却されたるのみ。

可憐の人

俊秀の一紳士あり、宴席に於て新橋の一枚書を見る、兩情相ひ得て相ひ歡ぶ、是より二人互に情を寄するの態あり、然るに女の出が、賤しくして、遂に士君子の仇

儼たる能はざる爲め、情を結ぶも交の長くすべからざるを思ふや、此の男子は情を忍び、遂に相狎れずして止みにき、斷腸の餘り一首を賦して曰く

與君相逢相思始 別後滴盡相思淚

頃來心緒亂如糸 英雄又有斷腸事

夢中見君情慇懃 十二峯頭雨和雲

覺來空房人不見 君思我時我思君

與君相思何所願 百年同心相縈々

金爐香盡更漏移 沈々春宵無限恨

思君立折中庭梅 西樓殘月影徘徊

定知開去花狼藉 不如自初花無開

粥の字

或人の曰く、意味より作りし漢字には、極めて滑稽のもの多し、粥の字の如き其となり、此字は元と茶碗の上に、箸、二本を置きたる意味より出たり、即ち○の圖の如し、圖に於る左右の半圓形は則ち弓の形を爲し、中には米あり、因て粥の字と爲ると、又、灸は火が緩かに久しくもえる故に火に久を加て灸の字を作れりと（此字は、後世の作ならん）漢字は其の昔し人文未開、智識未發の人民が作出せしもの故に、往々、此類の出所あるは、怪しむに足らず、落語家の説く笑の字の出所は、或人が犬の首に竹棒を結着けたるに、犬は之を振放さんと、種々に狂ひ走る、其姿の捧腹に堪えざるより、竹の字を犬の字に冠らせて笑の字を作れりと、此の名説は爾雅説文にも見當らぬ様なり、（其實、笑の字は竹に天にて犬にはあらずと云ふ）笑の字は犬の可笑き姿より來りしとは、コチ付けならんも、動物の或る舉動が、人をして捧腹せしむることは往々之れあり、殊に其の生來、をかしみを帯びたる驢馬の如きに至ては其の舉動、時として人を絶倒せしむ。

笑

抑々、笑ふと云へることは、人類の如き最高等の動物ならでは、無きことの様なり、無論、くすぐり、又は或る觸接を身體の或部分に加ふるときは、人類以外の動物にても、神経に及ぼす筋肉の作用より、笑ふことなきにあらざるべしと雖も、何等の觸接をも興へずして、唯だ或る意味より笑ふことは、人間の外、他の動物には決して之れなきやうなり、故に意味の感じより笑ふは、高等動物に限ると見ても可ならん。

嘗て、余の家に鸚鵡を飼ひしとき、人もなく鸚鵡のみ居る室内にて、笑聲を聞きたることあり、驚て行見れば人影なし、因て家人に問へば、此鳥は折々笑ふことありて、笑聲を聞くこと少からずと云ふ、其後ち色々試験し見たるに、此鳥は實に笑ふことあり、然れども畢竟、人の笑聲を真似て、其聲に倣ふに止まり、別段、をか

き意味を帯びて、笑ふにはあらざると分明なり。

又、馬など、笑ふことありと云ふ者あれども、實際は然らず、人間以外、をかきき事柄の爲に、意味より笑ひを發することは、他の動物には殆ど之れなし、猿の如く人に類するものにて、余が飼養経験せる所に依れば、決して笑ふことを知らず、因て思ふに、笑なるものは、喜怒哀樂の外なる、一種の感情が智力發達せる高等動物に生じたるものにて、笑なるものは、必ずしも喜びの爲に發するにもあらず、一の研究問題なるべし。

像の黄金頭

むかし、アプリーヤ侯ロバートギスカルド(千零六十年頃との事)が其の領内に於て、一の大理石像を一の山頂なる樹木の裡に發見せり、因て近傍の木を伐披らき見るに誠に見事の作なりしが、像の頸に銅環を遶らし、其環に彫刻せる文字あり曰く「五

月第一日の日出に於て、我は黄金の頭首を有すと、扱て此語の意味に就て、滿朝の智者、學者連中、種々に評議を凝らせども、其の意味を解する能はず、遂に廣く發令して、懸賞を以て此語の眞義を解し得る者を求めたれども、一人の答へ得る者なし、然るに其頃、偶々サラセン人にて此國に擽となり居たる者あり、之を聞て獄中より上書し、若し囚れを赦されなば、我よく之を解説せむと申出たり、依て其意に任すること、せしに、此者は翌年四月の終に於て、此像の傍らに至り、五月第一日、地上より出る太陽が像を照らす時の有様を眺め、像の首の日影の達する地を確め、直ちに其地を發掘せしめたり、廣く掘取るに及んで果して此處の地中に莫大なる多額の金銀寶玉の櫃を深く埋めあることを見出せり、依て候は其囚れを赦るせし上、尙ほ多額の金銀を賜て本國に送還せりと言傳ふ。

天文家の機智

西洋にも、斯る謎解及び頓智の物語は、昔時に多かりしものと見え、佛蘭西の有名なる大王路易十四世の時迄は、和漢に於ける如く、天文を見て吉凶を知る天文學者ありと信せられ居たり、當時有名なる一人の天文卜者あり、其言、往々に奇中し、世人の信仰大方ならず、王も折々は之を召すことありしが、彼れが嘗て佛國の事を占ひ人に公言せしこと、頗る王の逆鱗に觸れたり、王は之を召して死刑に處せむと決心せり、因て早速、此の天文者を呼出し、御前に伺候せしめ、王先づ問て曰ひけるは、朕は今ま、汝に占はせたまきことあり、汝の壽命は幾何の久しきを保ち得るやと、卜者忽ち王の氣色を察してこは唯事にあらずと考へ、容を正し謹で答へて言ひけるは「某の生命は、恐れ多くも陛下崩御の前二日に終るべし」と占ひ居れりと、王は之を聞き愕然として沈黙せり、蓋し此者の命が今日に終らば、三日を出でずして王も亦崩御の命連ある如く見ゆればなり、是に於て龍顏忽ち和らぎ、是より種々の恩賜ありて、成るべく長く無事に在るべしとて、其後は莫大なる扶持さへ宮中よ

り付せられたりと云ふ、是れも有名なる頼智話の一なり。

鵜飼

長良川の鵜飼は、人の稱する所なるが、十餘羽の鵜に付けたる十餘條の繩を、手さばき巧みに、縄れぬやう使分くるとして其の手練を賞美す、然れども、余は嘗て英國より昔し始めて支那に向ひたる大使の隨員の紀行を讀みしに、支那にては、鵜を使ふに繩を用ゐずと記したり、後ち予が蘇州杭州に遊びし時、途中にて、鵜使ひを見たるに、如何にも繩を付することなし、一艘の船に、多きは二三十頭の鵜を養ひ、隨意に之を放て隨意に船の側らに呼寄せ、魚をしぼる、此點に於ては支那人の方、鵜使ひに長けたりと言ふも可なり、又揚子江の上流にては、鵜を馴らして鵜の如く魚を捕るに用ふるものあり、斯ることは彼地の人は概して邦人より巧なり。

鰻魚

支那には、我國に無き川魚多きが、鰻魚の如きも其一なり、夫の「桃花流水鰻魚肥」の句は人の知る所にて、舶來せる支那畫に、我國の「めばる」に似て、一層扁平なる魚を畫きたるものを見ることがあるべし、是れ即ち鰻魚なり、其大なるものは北地にては一尺五寸位なるもあり、通例は一尺内外とす「めばる」又は藻魚の形に類し、又是等の魚の如く細鱗にて、肉の味は濃厚淡泊の中を得たり、之を刺身となすときは、頗る口に可なり、我國の鯛と「めばる」の味を混ぜし如きものなり、煮るも炙るも、味總て善し、支那北部にて、邦人の口に適すべき魚は先づ斯物に限る。北地には黒魚と稱する川魚あり、是も我國にては見當らぬ様なり、其形は、稍や「ホヲボヲ」「コチ」に類し、色甚だ黒し故に此名あり、大なるは二尺五寸内外あり、通例一尺五寸位のもの少からず、河湖共に産す、其味は太く劣りて食ふに堪へず。

銀魚

支那の上海邊にて、好味なるは銀魚なり、西洋人はサムライと呼ぶ、是も本邦にて見掛けたることなし(九州の西南岸には此魚に類するものありとも云ふ未だ異同を知らず)其形は鮒を大きくせしものにて、大なるは一尺五寸以上なるあり、通例一尺内外、鱗は鮒鯉の如く大にして、色白し、是れ銀魚の名ある所以ならむ、一見せし所、頗る、まづき魚らしけれども、其味は甚だ濃厚なり、但し骨の多きを憾みとす、肉は、グシャつき締らぬ方なれども、味は極めて佳し、北京には産せず、偶々南方より送來るときは、頗る珍重す、北京に在る時、彼國の大官より贈り呉れたることあれども、南の産なり、上海邊には甚多しと聞く。

菽乳

豆腐は、人の多く嗜しむ物ながら、豆腐るとの名は誰も面白からず思ふなるべし、支那人も同様に感ずると見え、元の孫大雅なる人は此名稱を嫌ひて、菽乳と名づけたり。

豆には窒素分多く、滋養品に充つべしとの説より、近來は東京などにも、牛乳の如くせる豆汁を、朝ごとに飲む人あり、南方の支那人は今日も牛乳同様に之を嗜む由、此の豆腐汁にこそ菽乳の名は最も適當すべし。

町が失せた

昔し、或村はづれの一家に、獨身者の住けるに、連夜、盗賊入りて、家財を過半奪去られしかば、主人は今夜こそ賊を捕へんと、庭にある大釜の中に潜み、待ち居たるに、深更に至り思はず酣睡せり、折から盗賊ども入來り、些とばかりの家具にては不足なりとて、庭の大釜に繩をかけ、四人ばかりして擔つぎ出し、五六町ほど

の橋の上に至り之を卸せし時、其の音に驚きたる主人は釜の中にて眼を覺し、ふと天を仰で星斗の爛干たるを見「南無さん、今度は家を盗で行かれた」と云へる昔話ありしが、八九十年前に倫敦のイスリントンに住せし、ヘンリー、トツプハムと云へる者は、非常の大力にて、三寸まわりの麻繩を、小さき木綿絲の如く引ちぎり、又三寸丸みの鐵棒を其頂に押當て、ギエツト頸の周圍に輪をなす程の力ありしが、其頃は倫敦にて町内七八ヶ町づゝ申合せ、人を雇ひ辻番の如く夜番を爲さしむるの風習ありて、其の番所は置函となしありたり、トツプソン一夜我が近處の函番所の前を通りしに、番人は職務を怠り、番函の中にて大解をかき居たりしかば、心憎くや思ひけん、そつと手をかけ其の番所を人ともに、軽々と抱えて十四五町ばかりの墓原に持行き、どざりと落して、窺ひ居たるに、番人は此音に目を醒まし、番所より飛出で、四邊を見廻はし「ヤア、町が失せた」。

吹簫の客

サアと云へば、晝に持出さるるは赤壁の賦なり、同賦中「客に洞簫を吹く者あり」と云へる句ありて、東坡の外に一人を添ゆ、余は初め其の何人たるを知らざりし、世人も其名を知らぬもの多かるべし、嘗て一書を見しに、此客は楊世昌と云へる人にて綿竹の道士なりと、明人の詩に

西飛孤鶴記何詳

有客吹簫楊世昌

とあるを證とせり。

景季夫婦

亂世の武士にも、詠歌の心得ある人少からず、義仲の如きこそ眞の田舎武士にて、京都を蹂躪し、縉紳の膽を潰せしが、頼朝の如きは之に反して流石京師に育ちし故

にや、詠歌の心得もあり、當時の朝廷をして彼を棄て此を取るの心を起さしめしは、獨り其の武威の爲のみにあらず、又霸府を鎌倉に開きし後も將士の中には詠歌の嗜みある人少からず、或る春に、頼朝が築地の隙より眺め居たるに一婦人あり下婢に大なる櫻の枝を持たせ通り行きしかば

のこりなく手折りてみゆる櫻かな

又來む春はなにをながめむ

と咏み、急ぎ人に持たせて女に贈らせしに、女は取敢へず

出るいきの入るをもまたぬ世の中に

又來むはるのたのまればこそ

と返したり、誰の女房なるやと、後を跟けさせしに、景季の妻とわかりしが、幾程もなく離縁の沙汰聞へしにぞ、頼朝は返歌の事を思出で、景季に諭して其事止みけりと言傳ふ、扱は景季は夫婦ともに歌の心得ありしと見ゆ、鎌倉の將士中、武勇に

並びて優美なりしは、景季を第一とす、左ればこそ梅花をも籠に挿みしなれ。頼朝が大僧正慈圓への有名なる返歌
陸奥の岩手信夫は蝦夷知らぬ
書き盡してよ壺の石文

の如き武將の作とは思はれぬほどの働きあり、其子に鎌倉の右大臣を出せしも偶然にあらず。

女嫌ひ

食、色、は人の天性にて、女嫌ひと云へるものは、世に無き筈とこそ云ふなるに、稀には奇人もあるものにて、千七百三十七年頃、英國にグロッキングと云へる紳士あり、天性、女を好まず、婦人と語を交ふる席をば避けて近づくことなし、しかのみならず婦人の手にて洗濯せし衣服さへ之を著けず、必ず男子の手を以て之をなさ

しむ、左れば其家に下婢を召使はざるは勿論、萬事萬端、皆な男子の手を用ゐ、男子の手にて出来難く婦人の手を煩はすべき物は必ず避けて之を用ゐざりしと云ふ、随分不可思議の人もありけり。

岳王墓

岳飛の墓は西湖の傍に在り、此邊は昔より青春には兒女行樂の地たりしと見え、踏青争登岳王墳、とか又は岳王墳上少逡巡、などの詠あり、余も西湖に遊びし時、其墓に詣せしが、墓は廣さ四五疊敷きと覺しき、セメントの土饅頭形なりき、墓前に門あり、之れを入れば左の方に鑄鐵にて作りし極めて粗造なる人體の胴中の様なるものあり、是れぞ彼の有名なる秦檜の像にて、參詣人が皆な之に溺するものなりとぞ、其の後に古記を見るに、明の正統年間、好事家が始めて此の鐵像を作り、其の後に又檜の妻王氏と萬俟卨との二像を添え、之れを反縛して墓前に跪かしめ、參詣人

は之に瓦礫を擲ち、且つ放溺して之を辱しめ、又王氏の像は其の乳房を摩擦して辱かしむる爲め、テラ〜として鑑むべしと記載せり、然れども余の往き見しときは、檜の外には他の像なく、檜の像すら、幸じて其の人形なるを知る程に錆び壞れたり、岳飛の墓も西湖の如き場處柄に在らざりせば、箇程までに人も訪ふまじきに、何分有名なる西湖の傍故に斯の如きならむ、明以後に岳飛を詠せし詩多き中にて廣瀬旭窓の左の一聯などは佳作なり

一世英雄太理獄

百年臣子小朝廷

其對の字々の切なるのみならず、百年臣子小朝廷とは如何にも當時の状況を道破し盡せり、旭窓の詩は總じて俳諧めきたれども、稀には斯る句もあり。

宜しき事なり

年賀の往來、名刺のやりとり杯は、總て虚禮なりとて非難する人あれども、一概に

各むべからず、節時の折目切目に禮意を致し、知人の間に互に無沙汰を詫ぶるは、總じて宜しきことなり、歐米にては新年よりも歳暮のクリスマスを重んじ、此日は遠近の知友に種々の意匠を盡したる祝賀の名刺を贈り、互に禮意を致すこと中々に賑はし。

如何なる知合の間柄にても、差したる用事なきときは、一年中を無沙汰に打過ぐることも少からず、然るを新年或はクリスマスの如き節時あればこそ、之を機として互に相忘れざるの意を致し、親睦の情をも表し得るなれ、然るを虚禮なりとて一概に排し去るは、宜しからず。

但し、歐米クリスマス節時にも、極めて近親にあらざれば親しく往來するの煩を爲さずして、互に名刺を贈るに止まる、我國の年賀も、行く／＼は斯くなり行き、最親の親戚朋友又は崇敬すべき長上の許にのみ往訪し、其他は年賀状の取り遣りにて、事を濟ますことならん、斯る名刺の取り換はしも、一向に無沙汰に打過るには

優れり、平生は思はず疎音に過行くも、互に年賀状の來るを見れば、其交の永續するを覺て、心地悪しきものにあらじ。

總じて維新以來、我が風俗は理窟一片に傾き、乾燥無味に走ること多し、舊來の五節句の如きも、之を存すればとて、一箇年に僅か四五日の事のみ、之を祝して安息の日となすも、苟ち不可にはあらず、歐米諸國にても、其の國俗に依り、日曜以外に、一箇年數箇度の安息祝日あり、斯る日柄なれば、わざ／＼業をも休み得ざる中等以下の子女も、是等の日をば、一年中の待ちに待ちたる機會として、貧富とも身分相應に身元を飾り、一日の遊樂をなす、亦た好ましき事と云ふべし。

屠 蘇 酒

年頭に屠蘇酒を飲むは、支那傳來の事に相違なきも、我國にては何れの頃より始まりしにや、随分に古るきことなるべし、然るに本家本元の支那にては、此俗は久し

く廢れたりと見え、余が北京に在りし時、年頭に彼地の士大夫に逢ふて、屠蘇酒のことを語り出でしに、誰も知る者すらなし、獨り翁同龢氏のみは、流石博學にて、忽ち應答を爲し、日本に今尙ほ此俗あることを深く驚き居たり、我國にては今日都鄙ともに大抵の都邑にて、年頭に屠蘇酒を飲まざる者なく只だ山間僻邑は普通の清酒にて事を濟ますも多し、然るに三四年前なりき年首に下總の銚子町に遊びし時、元旦に屠蘇酒を祝はむとて注文せしに、旅館の者之を知らず、處々の藥種屋を吟味して辛じて之を得たり、同地の如きは東京附近にてありながら、斯の如きは銚子と云へる町名にさへ辜負するに似たり。

雜煮

屠蘇をば斯く用のぬ地あれども、金殿玉樓より賤の伏屋まで、國內を通じて年頭に祝せざる者なきは蓋し雜煮なるべし、雜煮にも味噌仕立あり、清汁仕立あり、餅に

添ふる具も、家々の慣例あり、全國一様ならず、然れども概するに京阪地方には味噌仕立多く、東京及び各舊藩の都城には清汁仕立、多きに似たり。又正月の瓶花も地方に依り、風習同じからず、東京にては正月の瓶花に葉牡丹を挿む者甚だ稀なれども、京阪地方にて洒落たる家は必ず葉牡丹を挿ざるなし。朝鮮の嫁入には慈姑を用ふる風習あり、之れ姑が嫁をかはゆがる(慈)と云へる縁喜に取りしものなりとて笑ふ人あれども我國にて正月の食摘と稱ふる飾物など、皆な縁喜を祝する物ならざるなし、是も亦た善き事なり、橙は代々歟、楪は代々讓るの義歟、勝栗は負けぬの意味歟、昆布は喜こむぶ歟、鰻は腰の屈む迄と云へる意味、米は食を絶たざるの意、炭は久しきに堪ふる物は松は千年の壽、其他色々の家毎とに趣は異なれども、先づ以上の品々は必ず其中に加はり居る様なり。

繪畫と事實

凡そ繪畫は唯だ大抵に畫くこそよけれ、若し一々に事實故實を取糺さば、随分不風流となるものなり、世に富士見西行とて、西行が富士を眺め居る畫あり、然るに若し此繪の富士山が噴火し居らば如何ん、歌人たる西行の風流も、ちと騒々しく見ゆるならむ、併し實際は同人の頃までは富士山は、まだ噴火して、盛に煙を吐き居りにあらぬ歟、新古今集に「東の方へ修行しはべるに富士の山を讀める」と云ふ題にて

風になひく富士の煙のそらに消えて

行衛もしれぬ我が思かな

とは西行の詠なり、此歌の富士の煙とあるは噴火の煙と見るの外なし、左らば富士見西行の畫には、噴火せる富士を畫くこそ事實なるべけれ、然れども左る繪柄にては、ちと不似合には見へぬ乎、蒔繪物などの富士見西行の繪に、富士山より噴火し居らば、随分、異なるものならん。

事 實 と 相 違

又鍾馗の繪にある小鬼は通例の鬼と同様に虎皮の犢鼻褌を締め居らざるなし、然れども事實より理窟を云へば、右は赤犢鼻褌を締め居るべき筈のものなり、又鍾馗の袍は藍色に染むべきものなり、然るを他色に染るも亦た事實に違へり。

鍾馗の話は、元と玄宗皇帝の夢より出でたるにて、開元年中、玄宗が驪山に幸し、武を講せし時、夢に赤犢鼻褌をしめたる一的小鬼來りて、楊貴妃の香囊と玄宗の玉笛とを盗み逃出す、玄宗之を叱せしに、我は虚耗なりと名乗て跳躍す、玄宗怒て武士を呼べども來る者なし、時に烏帽を戴き、藍袍を着て革帶し、朝靴を着けたる一の大鬼出で来て、小鬼を捕へ、其眼を抉抜き、扯裂て之を喰ふ、玄宗其名を問へば、臣は終南山の進士鍾馗なり云々と、玄宗夢覺めて、有名なる畫工吳道子を召し、此圖を寫させたるもの、則ち鍾馗の畫の始なり、左らば小鬼の虎皮褌、及び鍾馗の

淡紅袍など、全く事實に反す、然れども斯くやかましく論ずれば、何事も畫をなさずして其の趣味は没却さるべし、故に畫は畫として、大抵に描くべきのみ。

摩詰の雪蕉

支那にて、南畫の開祖は王摩詰と稱せらる、然るに此人が、青き芭蕉の葉に雪の積りしところ、謂はゆる雪蕉の畫を作り、後人之に倣ふ者多し、後世の支那人、之を非議して曰く、雪の降る頃は、芭蕉は既に枯れて、其葉は黄色なり、然るに青藍色なる春夏の芭蕉に、嚴寒の雪を帯ぶるは何事ぞやとて、「雪蕉失冬夏」の句あるに至る、又之を護する者ありて曰く、廣西地方は、芭蕉も常に青色なり、而て偶ま雪を戴くこともあり、摩詰は之を畫きしなりと、支那本土の景色を捨て、態と邊鄙至極なる廣西の芭蕉を摩詰が畫きしにもあるまじ、此畫は元と唯隨意勝手に青蕉と雪とを取合せたる迄ならん、然るを非難も非難なり、辯護も辯護にて餘りに仰々し、

畫は只だ大抵に畫て、大抵に評すべきのみ。

夢の地

北米のニューエングランドに、今も夢の土地(ドリーム、ランド)と稱する處あり、此の地名の原由を記するもの頗る面白し、合衆國の獨立以前、此地が尙ほ英領たりし頃、亞米利加土人は尙ほ多く北邊に住したり、英の殖民地總裁はジョンウキヤムと云へる人なりしが、此の豊饒なる土地の多分を領せし土人の酋長ヘンドリックと、互に睦じく往來交際せり、折りしも、一年、英の本國より、總裁の許に美麗なる刺繡の外套一領を贈り來れり、其頃は太平洋の交通不便にて、斯る物品は新殖民地に珍重せられたること勿論なり、一日總裁は土酋の來訪せるに際し、此の外套を持出で誇せしに、彼は非常に垂涎せし様子なりしが、翌日又た來訪して語出でけるは、某し昨夜は一大吉夢を見たりと、之を問へば、則ち曰く、余は閣下より夫の美麗な

る外套を賜はりしを夢みたるなりと、是に至て總裁も、ノッピキならず、遂に夫の外套を取出して贈り與へしかば、ヘンドリックは満悦の體にて持歸りたり、其後ち兩三日を経て、總裁は土酋を訪問せり、先日贈物もあれば鄭重に之を饗應せしに、總裁語り出けるは、某し昨夜は非常なる吉夢を見たりと、其の説明を求むれば、則ち曰く、昨夜、土酋殿下より某に向て河の東にある幾十方里の土地を贈與せられたるを夢みたり實に喜悅に堪へざりしと、土酋も亦たノッピキならぬ場合となり、遂に惜し惜しと此の土地を讓與して、且つ曰ひけるは、閣下、最早や余等兩人は互に再び夢みることを見合せるべしと、此地は今日迄も尙ほドリーム、ランド(夢の土地)の名を帯び、ニューエングランドにては最も豊饒なる一部分に數へらる。

帽子屋の看版

フランクリン氏の記録に、同氏の友人にて、新に帽子屋を開業せる者あり、先づ其

の看版を極めて好き文句に爲さんとて、「帽子製造人トンプソン、自作の帽子。現金賣」とし其の傍に帽子の圖を添へたり、而して之を一友人に示せしに、其人曰く「已でに帽子を賣ると記する上は、強ち製造人の文字を要せず」と依て之を削去る、次で他の一友人に示せしに、其人曰く、當所は掛賣の風習なし、孰れも皆な現金賣なり、故に現金賣の三字は不用なり」と、乃ち又之を削去る、其の次の友人曰く、「帽子さえ宜しければ、自作と他作とを論せず客人之を購ふべし、自作の帽子と斷るに及ばず」と又之を削り去る、是に於てか、其の看版は單に「トンプソン」の一語のみと爲り了りしと云ふ、人に謀るも宜きことながら、餘りに彼方此方と持ちあるき衆説を採用するときは、此の看版の如く意味の分らぬものと爲り了ることあり。

其の通り疑ひなし

或る場合には適當せぬ語も、或る場合には適當す、昔しペルシヤ人あり、山より鸚

鵓を捕り来て人語を學ばしめしが「其の通り疑なし」と云へる一語を習ひ得たり、左らば、高價に賣却せんとて、市場に持行き、之を百金に鬻ぐ、其頃ろ、アルメニヤの一富人あり此鳥の正札百金とあるを見て、鳥の側らに來寄り、つくづくと眺め「眞に百金の價あるべきか」と獨語せしに、鵓、忽ち答て曰く「其の通り、欸なし」富人吃驚して大に喜び忽ち百金を投じて購ひ歸り、種々の人語を語らせむとすれども之を能くせず、是に於て又大に失望し、百金を失ひしを悔ひ「余は實に大痴呆なり」と獨語す、傍に在る鵓曰く「其通り、疑なし」と富人覺えず絶倒し、遂に鵓を放ちたりと。

誤解の騒ぎ

言葉の行違は時として大騒ぎとなる事あり、北米合衆國の尙ほ英領たりし頃ミスシツビー株式會社と云へる、大計畫ありて其の株式は一時非常に買入ありたるものな

りしが、英國の有名なる醫師シイラックと云へる人も亦た此株を買込み居たり、偶ま一貴夫人が急病なりとて招かれ、其方に赴かむとせし時、此の株式は大暴落にて、氏が其家を立出る時に其の報知を得たり、先生非常なる損耗に弱りつゝ、病家に赴き、貴夫人の脈をとりながら、口の中にて、下つた〜大變だと呟きしに、此言、忽ち病人の耳に入り、病人は飛起きて俄に婢僕を呼寄せ、遺言書を作り始めたり、氏は驚いて之を質せば今ま先生は「下つた〜大變だ」と言はれたり、我脈も最早や非常に沈滞し、臨終に近しと覺ゆる故に、斯の如し」と聞き「實は拙者の株式が下落せし次第なり」とて、大笑ひとなれりと。

雑報の標題

新聞の雑報の見出しの標題は、簡單なる中に長き意味を含ませる必要ある爲め、時として人を失笑せしむるもの多し、一昨々年なりし歟、貴族院が政府案に反對し、

内閣は持て餘せしとあり、其時、或日の新聞の雑報の標題に「貴族院去勢法案」と記せるあり、如何にも當時貴族院の去勢は極めて良き法案なり、蓋し此時に馬匹去勢法案なるもの貴族院に廻りたる簡略の見出しにて、時節柄なりし故に人をして失笑せしむ、又其後或新聞の見出しに、横濱の人道廢止と記するあり、一寸と驚きて、よくよく見れば車道人道の修繕中に、人の通行路を廢止すると云へる意味なりき併し突然に人道廢止は随分に人を驚かすに足る。

悪戯の一

昔し英國にて(七八十年前の由)地方なる牛肉屋の主人が一頭の犢を買出しに近所の都府に來り、犢を買ひし後ち懇意なる靴屋の傍に其犢を繋ぎ置きて一寸と用達しに赴きたり、然る處、此の靴店の靴工に飄輕者あり、主人に向て曰けるは、若し某に一コツプの酒をおごられなば、某必ず首尾よく彼の犢を途中にて竊み來るべしと、

主人は笑て之を諾したり、此の靴工は兼て牛肉屋が其の歸途に必ず八九町先きなる深林の中を過ぐべきを承知し居れば其者より一足先きに駈行きたり。

扱て、牛肉屋は斯くとも知らず、犢を牽きながら夫の林中を過ぎしに、新らしき靴一つ道傍に落ち居たり、然れども片方の靴を拾へばとて何の役にも立たぬと思ひしにや、其儘に過行きしが、又十町ばかり先きに、今の靴の片足と見ゆる一の靴、落ち居たり、是に一雙の靴を得たりと思ひしかば牛肉屋は其犢を傍の樹に繋ぎ置きて(ノロノロと歩む犢を連れ行くは面倒ゆゑに)己れのみ前の靴を取らむとて馳行きたり、其間に靴工はソット夫の犢を牽きて別路を取り難なく店に牽き來れば主人大に感服せり

牛肉屋は元の處に歸來り我が犢の見えざるに驚き、彼方此方と尋ね廻はれども見出し得ざりしかば、餘儀なく再び市場に歸來り、彼の懇意なる靴屋に行きて「トンドダことを仕出來し、犢を竊み去られたり、又是より更に一頭を買て歸へらねばならず」

と愚痴をこぼせし故、亭主は大に笑て市場に行く迄もなし幸ひ我家に犢あり、之を買はざるやとて曳出し見れば、前の犢に寸分違はず、扱て値段の押合となりしところ、牛肉屋は前のより痩せ居ると言ひ、押問答の末、前の價より一割五分の安價にて之を買取り愚痴をこぼしつゝ、歸り行きたり。

靴工は又亭主に向ひ、今ま一度、更に犢を竊み來らば又一盃をおごり給はるべきやと云ふ、亭主承諾を興へしかば、則ち大急ぎに別路を取て林中に馳行きたり、牛肉屋は縁喜の悪き日とつふやきつゝ、悔しさうに前の犢を竊まれたる處に至りし頃二三丁を隔て、遙かに犢の鳴き聲あり、偕てこそ前の犢を見出したりとて、今の犢をば其邊の樹に繋ぎ置き、逸足出して聲の方へと走り行けば、其聲は次第次第に遠く聞ふるにぞ、益すあせりて、馳行きたり、犢の聲を真似たる彼の靴工は別路より廻り來て又繋ぎ置きたる犢を牽き、大急ぎにて歸來れば、亭主其他の者ども喝采して之を迎ふ、其中に牛肉屋は失へる犢を林中に尋ねわびて、元の處に歸り見れば、

二度目の犢さへ又竊み去られたり、今日は如何なる悪日ぞとて、スゴく歸宅せむとせしが、アマリ忌々しく女房の手前も面目なし、且つは注文の品故にこれ無くては歸られずと、又も彼の懇意なる靴屋に立寄り、亭主其故を問へば牛肉屋は委細を語りて非常に落膽せしかば、主人又「此に一犢あり再び買ふべきや否や」とて彼の犢を曳出し始て其の顛末を打明け話せしに大笑となれり遂に牛肉屋は二三瓶の酒を奢らせられ大喜びにて歸宅せりと云ふ。

獨りか寝る

歌人と素人は歌に付ても見處の違ふものによ、同じく人麿の作にて「ひとりかも寝む」と云へる歌にても

足曳の山鳥の尾のしたり尾の

永々し夜をひとりかも寝む

と云へる枕言葉のみながくしきに比すれば
衣手に山おろし吹きて寒き夜を

君來まさすはひとりかも寝む

の方、餘意ありて優れるが如く見ゆるに、百人首の選者は前者を取て後者を捨てたり、又同じ蟬丸の歌にても

これやこの行も歸るも別れては

知るも知らぬもあふ阪の關

と云へる諧謔に近き作よりも寧ろ

秋風になひく淺茅のする毎に

置く白露のあはれ世の中

とか

世の中はとて角ても同じけれ

宮もわら屋もはてしなけれは
の如きこそ浮沈の世態を觀じたる趣味の多きに、百人首には又後者を捨て、前者を取れり、歌人の見處は格別のもつと見ゆ。

二歌の優劣

人口に膾炙せる平兼盛の

忍ふれと色に出にけり我戀は

物や思ふと人の問ふまで

の作は古今の戀歌中にて第一等と稱せらる、如何にも秀絶に相違なし、然れども吾より論ずれば戀歌の中にては

いかはかりうれしからまし諸共に

戀ひらるゝ身も苦るしかりせは

と云へる鳥羽帝の御製の如き傑作は見當らぬやうなり、此の前後二首の甲乙を知らむと欲せば、假に之を漢詩、又は英歌に翻譯して玩味せよ、後者には無限の餘意ありて前者に優れるを見出すならむ、併し詩歌に對する人の好みは各人一樣ならざること、恰も味感の世界にも餅好きと酒飲みと下戸上戸ある如く、百人百様なり強ちには云ひ難し。

鬼のしこ草

前年但馬に遊びし時、一旅館に至れば、床の間に和歌の軸を懸く

時來なはやかてみなから刈捨てむ

しこらはしこれ鬼のしこ草

と書し激越の調あり、尋常人の作ならずと落款を見れば藤本鐵石なり、此人が事を興ぐる前に其の心血を吐きしものと思へば、坐ろに一種の感を生じたり、肺肝より

出でたる詩歌は實に人を動かす。

蜀山人、唐伯虎

金屏風に、「此處小便無用」と書して人を驚かし、後に「花の山」と附けたる其角のいたづらは、人口に膾炙する話なるが、蜀山人も折々此手を用ゐしと見え、いつの頃にかありけむ、客あり山人の廬を訪へば、二枚の襖の片方のみ開きあるに

わが庵に客の來ることうるさけれ

とあり、其人甚だ不興に感せしが、後ち片方の襖をみたるに

とは云ふもの、お前ではなし

と下の句ありて、大に顔色を直せしと

有名なる唐伯虎なども折々此手をやりしと見え、伯虎の向ふ町に住する一富翁あり、かねく、懇意にせしが、其母の七十の賀に、伯虎の詩を求めて、時人に誇らむとて、

所望に來れり、伯虎、容易く承諾し、大筆を揮て曰く

對門、老婦不是人

富翁之を見て喫驚せしに、次の句を書して曰く

好是南山觀世音

と富翁の意稍や解く、又書して曰く

兩箇兒子都是賊

是に至て富翁、顔色を失ふ、乃ち次句を書して曰く

偷得蟠桃獻母親

と、富翁大に喜び、揚々として持去りし。

蟠桃

東方朔が、西王母の許より蟠桃を偷去れりとは、誰にも耳熟れたる話なるが、蟠桃

とは如何なる桃かと疑ひ居たりしに、余は支那に赴きて始めて之を知れり、其の形ち、上より押拉ぎし如く、扁平なる一種の桃ありて、其の味、甚だ佳なり、今は通例之を「扁桃」又「片桃」と稱す、然れども其の押拉げて蟠まりし如き姿に取り、蟠桃と稱するも當れり、通例の畫に東方朔の手に携ふるは蟠桃ならずして普通の桃なるもの多し、支那にても亦た然り、近來は此の扁桃も上海より我市場に折々輸入し來れり。

西王母と乙姬

畫にあれ、物語にあれ、總て人は單調を喜ばざるが故にや、男子に雜ふるに女子を以てし、偉男子に配するに美人を以てす、故に其初は男子たる人物も後世には妙齡の美人と化し了るあり、又醜怪なるべき者が美人と化し了るもあり。

西王母の如きも其の一例なり、穆天子傳に曰く、西王母は人の如く、虎の齒にて、

蓬髮、よく嘯くと、抑も西王母の話の最も古るきは、周の穆王が之に邂逅せしと云へるに在り、然るに右の古傳に據れば、其の狀貌極めて醜怪にて妖物同様なるに、何れの時より變化しけん、後世に至て、西王母と言へば、窈窕たる美人と定まり居るが如し、東方朔にせよ、穆天子にせよ、相手の如何に拘はらず、若し之に配するに虎の如き牙を嚙出したる鬼子母神同様の醜物を畫かむには、到底掩映の美を盡くす能はず、配合の美は之を嬋娟たる美人に描くに在り、是れ亦餘儀なき次第なり。我國の物語にて、龍宮の乙姫の最も古るく現はれたるは、俵藤太秀郷の物語なるが如し、而して此の物語を最初に記したるは、太平記なり、同記に據れば、瀬多の長橋にて秀郷をやとひ、大蝦蟇を射らしめたるは、龍女にあらずして男龍王なり、然れども猛者と相ひ掩映せしむるには窈窕たる佳人を要すと見え、其後の諸書に現はるゝに至ては、皆な謂はゆる乙姫となり、窈窕たる美人と爲り了れり、斯くてこそ、事物の配合、掩映の妙も生ずるなれ、正史ならぬ物語は總て面白きが宜し、女子に

て妙なる場合には女子に改むるこそよけれ。

義の字

何物にあれ、假に用ふる物には、義の字を用ふ、此頃我國にても、義足とか義齒などとして、是等の場合に義の字を用ふ、髻の如きも亦た義髻と稱すべし、楊貴妃が、かもじを用ゐしことを記せし支那の書に、之を義髻とせり、又今の人が琴を弾するとき其の指に假爪をはむるを、例とす、是等も支那にては義甲と書しあり。或人の説に、項羽が諸侯と楚の王孫を尊んで帝となし、之を義帝と稱せしも、仁義の義の意味にあらずして、假帝と云へる意味なりしと云ふ、ちと穿過ぎたる説なれども、幾分の理なきにあらず。

漢壽亭侯

通俗三國志などにも、關羽が曹操の許に在りし時、其の戦功に依て、漢壽亭侯に封せられしを記するは、小説を讀む者の知る所なるが、通例之を稱して漢の壽亭侯關羽と云ふ、則ち曹操が尙は漢帝を戴きし時にして、雲長は漢の爵を受け魏の爵を受けたるにあらざることを示す如く思ふ者多し、右は支那にても同様、支那人も亦た漢の壽亭侯と云へる意味に解し居るを常とす、然れども一説に右の封號は「漢」のにあらず「漢壽亭」と一氣に讀むべきものにて、漢壽と云へる亭は、明の叙州府の犍爲郡に在りと云ふ、左すれば漢の壽亭侯とは讀むべからざる筈なりと此説、是に近し。

梁山泊の三十六人

支那の有名なる小説にて三國志に次ぐものを水滸傳とす、其の盜賊共の數、百八人なり、然れども事實に據れば、宋江等が梁山泊に據りしときの頭分は三十六人に止まりしなり、然るを後世の小説家が其數を三倍して、茲に百八人となせしのみ、但

し三十六人の名は一々詳ならざれども、花和尚及び一丈青の如きは當時實際にありし名稱にて、後世小説家の作爲せし者にあらず。

大内來

敵國の強き大將の名字を唱て小兒を嚇とし其の啼を止めしは夫の「遼來」を始め、支那にて歴代後世まで其類甚だ多し、宋の時、夏人は劉錡を恐れ「劉都護來」と唱て兒啼を止めしと云ふ。

子の郷里は日、豊、の境なるが、子の幼時七八歳の頃、日暮、遊で家に歸るを忘れむとす、家より婢僕等來て之を連れ歸らむとするときには、必ず「早く歸り玉へ」オオチ」が來ます」として嚇すを例とせり、右は城下の子供一般に此嚇しを受けたることなり、故に幼時には唯「オ、チ」とは恐ろしき妖者の類を意味する言葉とのみ思居たりしが、今日に至り考ふれば、右は周防の「大内家」の兵が豊後、日向に折々寇

せしことありて、大内の名を稱へて、其昔し小兒を嚇せし言葉が幾百年の後まで尙ほ其土に遺りしものたるを知れり、當時大内の武威が如何に西邊に輝きしかを知るに足る。

飛鳩、蛛網

人類想像の働きも、大抵相似たるものにて、自然と暗合するもの多し、頼朝が朽木隠れの危難に、梶原が之を救はむとて、弓を以て朽木の中を搔廻せば、山鳩飛出で人なきを知らしめたりと云ひ、又梶原は其兜に朽木の中なる蛛網を被て出で、若し先きに人の入るあらば斯く蜘蛛の網はあるまじきとて、追兵を宥めしこと人の知る所なるが、支那にて漢の高祖に關し、恰も同様の物語あり、但し右は正史にあらず、後世の物語なれども、頼朝の事と殆ど符節を合する如し、汜水縣の東、十五里に厄井あり、高祖戰敗れて此の空井の中に入る、項羽の兵來て之を搜らむとせし時、井

中より雙鳩飛出たりと、又、高祖が雍齒の爲に追はれ、空井に隠れし時、追兵到り見れば、其の入口に蛛網が張詰り居たり、扱は人は入らざりけりとして立去りしと云ふ、漢の世に汲黯が滎陽の太守となりし時、此井の側に神蛛の廟を立てたることを記せり此井をも亦た後世に厄井と稱する由。

饅頭

支那にて饅頭の起原を記する者あり、曰く、野蠻は人頭を以て神を祭る、昔し孔明が南蠻を征せし時、蠻中の此を惡俗を救はんとて、命じて麵包にて肉を包み(肉を餡にして皮を麵包にし)人頭に象て祭に之を用ひしめたり、最初は蠻頭と稱へしが後世次第に訛音して今は饅頭となりしと云ふと、ちと附會の説ながら記し置く。

指輪

婦人が指輪を嵌むることは、支那西洋共に古るき俗にて、珍らしからず、其の起原は蓋し裝飾に過ぎざるべきも、西洋にて後には結婚の證となし通例、之を左手の無名指に嵌むるの慣ひなり、是れ昔は人の神経が無名指に集ると思ひしより、此の指に崩めたるものなり、而して此の事は既に千有餘年の前に在り、支那にても元と裝飾より始まりしならんが、三代の周の頃には専ら之を以て、王侯の宮人が進御する時の進退のしるしに嵌めさせたるものなり、故に當時は指輪に戒指の稱あり。

看菓

支那にて祭の時、神に供する爲め、種々の肴果の形を作り、彩色を施し、恰も實物の如く見ゆるものあり、又西洋諸國の麵包屋、菓子屋、などにも彩色を用ゐる恰も實物の如く見せ之を店頭に並べて招牌となすものあり、時として意地の汚き泥坊が眞物と心得、之を盗み逃出して捕へられたることなど新聞に見えて笑ふことあり、

此等の假造品を、支那にては看果と稱す、極めて妥當なり、看るのみにて食ふべからざればなり。

王新建伯

王陽明は若年の時、極めて象棋好にて、常に之に耽けりしかば先生の父、屢之を意見すれども止まず、遂に大に怒て象棋を河に投棄したり、先生竊に詩を作て曰く

象棋終日樂悠悠 苦被嚴親一旦丟

兵卒墮河皆不救 將軍溺水一齊休

馬行千里隨波去 象入三川逐浪游

砲响一聲天地震 忽然驚起臥龍愁

支那歴代の學者中にて、先生の如く霸氣の滿ちたる人なし、今日より見れば、其の學說、通せざる所ありとするも、兎に角、良知良能を押し立て、刻苦して之を己れ

に求むるの學風は、又一種の妙味あり、故に世務に當り事を處するに至ては、宋儒輩の道學一片の窮屈なるが如きにあらず、其の宸濠を誅し功を立てし前後の働を見るに、なかく普通道學先生の手にあらず頗る變通あり、廣瀬淡窓なりしか青村なりしか、詠史の題にて左の句ありしと覺ふ。

心學何曾無權變 捷奏中加獎倖名
 と、溫厚なる詩人も亦た斯る皮肉の語あり。

人の名

生れた子に命名するは、一寸と六ヶ敷ものなり、子の如きも是迄、名親に頼まれて、人に命名せしこと少からず、七月中にも知人より頼まれ、生兒に命名すること二回あり、いづれ其子の生立の幸福繁昌を祝する目出度き名を付けるは、通例ながら、扱て一旦思ひ煩ふときは、彼れ善からむ、此れ惡しと、往々に惑ふことあり、一た

び惑ひ始むるときは、善きが上にも善きものと躊躇し、名の意味が好ければ唱への口調如何と願ひ、唱へが好ければ、意味が不足なり、杯と種々に考ふ

故に目出度き善き字の中にて、差向き胸に浮びし最初のもを、直に採擇すること、最も善き方法なるに似たり、古人も生兒の命名には、成るべく無造作にして、其時に目に觸れ胸に浮びたる善き名を付ける流義の人多し。

孔子は聖人とも言はるゝ人ゆゑ、其子の生れし時には、定めて六ヶ敷き理窟ある名を付けたるべく思はるれども、實際は然らず、孔子は其子を鯉と名づけたり、其のいわれを調べれば、子の生れし時に、丁度、人が鯉魚を贈り呉れたる故、直に之を名として鯉と名けしなりと孔子のみならず、有名なる人に此例多し、故に、七月中に、余の頼まれたる一兒には、勝の字を用ゐたり、則ち我軍が連戦連勝故に差向きを之を擇びしなり、又他の一人には安の字を用ゐたり、當時此兒の父が從軍して恰も安東縣に在り、且つ先頃鴨綠江の戦に、我軍勝利にて安東縣を占めたる吉瑞に取り、

又安の字は其の意義も甚だ宜しければなり。
 歐米人は、生兒の命名に、餘り心を勞せぬ様なり、何となれば、通例はクリスチャ
 ンネームを用ゐ、ジョンとか、チャーレスとか、ゼウジとか、大抵其名は定まり居りて、
 和漢人の如く工夫を凝らす必要なければなり、但し歐米人は其の父祖のクリスチャ
 ンネームを、其子に命ずること少からぬ様なり、人情は相似たるものにて、我國にて
 も其家の通名、又は祖父曾祖父先代の名を、生兒に授くる者多きと、恰も同様なり。
 福澤先生が、其の令息に、市太郎と命名されしは、先生の家の先代にありし名なり
 と言はれしやに覺ふ、今の市太郎君則ち是なり、先生も六ヶ敷名を擇ばれざりしと
 見ゆ。

併し支那にも歐米にも無く、日本に一種の風とも見るべきは、其名を其姓と連續せ
 しめて意味を作るの一事なり、例せば山の田、即ち山田と言へば、善く穀物が出来
 ると云へる連續の意味にて、豊作と命ずるの類なり、姓の意味に名を連續せしむる

此風は支那人杯より見れば姓名貫連の意味が現はれ大に驚くことなるべし、森茂の
 類の如し、此の一事は、支那には絶無の様なり、且つ支那の姓には意義なきもの多
 し、中世以來、支那人の名を擇ぶは、多く之を経義字義に取る、偶には孔子流の人
 も之れ無きにあらず、日本の如く姓に連なる意味の名を擇ぶは世界無類にて日本の
 みに限る。

別事ながら、日本人は字義に於ては、折々通せざることを爲すとなきにあらず、東
 京府、京都府の、名の如き是れなり、若し北京ならむには、其府は之を順天府と名
 け、而して此地は北の京なるが故に、之を北京と稱す、若し北京府と命名せば、支
 那人は其の意義の通せざるに驚くならむ、東京府京都府杯の名稱に至ては、漢學者
 より言はゞ、可笑き名稱なり、支那風に言へば、之を千代田府と稱へ、而して東の
 都なるが故に、之を東京と稱するを當れりとこそ言ふならむ、併し名稱は何でも善
 し、間違ひなりにも、呼び慣るればそれにて可なり。

孟子の子、韓信の子

前に、孔子の子は鯉と云ふことを述べしが、孟子の子の名をば知らぬ人多き様なり、眞僞は知らざれども、塵談に、孟子の子の名は罕と記せる旨を書せしものあり、或人の説に、罕は孟子の從兄弟なる孟仲子の名なりとも云ふ。

又韓信は刑せられて、其族を斷ちしと傳ふ、然るに或書に、韓信の孤兒は蕭何が憐みて、之を匿まひ、南に逃れしめ、南越王尉佗に托したり、此兒が成長せし後は章を姓とす、韓の字の一半を取しなりと云ふ、此人は後武功ありて富貴に終りし由、蕭何が遺孤を尉佗に托せし書翰は後世まで章氏に珍藏され居る旨をも記せり、ちと信じ難き話ながら、左も事實らしく記載せり。

雙生兒の兄弟

雙子の生れし時、先に生れしと、後に生れしと、孰れを兄とし弟とすべきやは、支那にても論あるなり、我國現在の習俗にては、後に生れたるものを兄とする者多き如し、漢人の筆に成りしと傳へらる、西京雜記の中に、下の記事あり。

有名なる大將軍霍光の妻が、雙子を生めり、或者は後生のもを兄とするを可とし、或者は初生のもを兄とするを可とし、議論決せざりしに、霍光は、初生のものは早く此世に出で、るが故に兄とするは順なりとて、遂に此説に定まりしと云ふ、同書の記する所にては、滕公も亦た雙子ありしが、初生のもを兄とし、後生のもを弟とせる由、然れば前漢の有名なる人は、雙子の兄弟を定むること多く此の如くなりし歟。

艦上の雄鷄

或る新聞に記す、軍艦淺間には、兵員の愛する小犬あり、敵と戦ひ砲火を開くとき

は、威勢よく飛廻はりて、敵艦に向て遙に吠哮し、恰も戦を挑む如き状ありと、禽獸もよく飼馴されたるものは、多少は飼主の境遇を覺るの天性ありと見え、其の伶俐なるものは、時として斯る振舞を爲すの例なきにあらず、英國の海戦記に、右の犬よりも一層奇異なる記事あり。

英の提督ロッドニーが、亞米利加の西印度諸島附近にて、佛艦と戦ひし時のことなり、此の英艦には、久しく飼馴らせる一羽の雄雞ありて、全艦員の最も愛する所なりしが、扱て前記の戦に砲撃の始まるや否や、彼れは中甲板より上甲板に飛び上り恰も戦を挑む如き身振りをなし、昂然として提督と參謀との間を駈廻り、轟々たる砲響をも恐れず、五六分間毎に高く鬨を作つて長鳴を擧げ、勝鬨を奏するが如く、羽を擴げ左も味方を勵ます如き姿態にて、其邊を絶えず飛廻り居たり、提督は酣戦中に、之を見て參謀に向ひ「ア、此の勇ましき鳥を視よ、彼すら此の如し、是れ亦た我國の譽れなり」と叫びたり、犬はまだしものこと、鳥に至て此の振舞ありとは、蓋し

亦た奇なり。

ガラスの破片

ナポレオン時代、英佛の戦に、英國の一小艦不意に佛國の巨艦と洋中に相會し、接戦の末、力及ばず遂に白旗を掲げ、艦員總て佛艦の捕虜となりしが、佛の提督は英の艦長を冷遇し、且つ之を詰責するに「何故に武士の作法に背き、汝等の大砲にガラスの破片を装填し、我に向て射撃せしや、兩艦相接せし最後の砲撃に於てガラスの如き物、我艦に散亂せりとの訴あり」と英艦長は實際、斯る覺えなきとなれば、不審に堪へず、頻に其冤を辯疏せし末、遂に兵員一同を取調る事となりしに、下の如き事實を見出せり。

英艦が白旗を掲げむとする刹那、最後の砲を放たむとする時、英艦内なる一のアイルス海兵、兼ねて飄輕者なりしが、悔しさの餘り、彼等佛蘭西の貧乏人共は一シ

ルリングの金も持たぬならむ、如何に我が賄賂の利目あるかを見よ」とて己れのボ
 ッケットより二十五錢銀貨の一包みを取り出し、帆布に包みて、砲内に填装し、之を發
 射せしかば、小銀貨はバラ／＼と敵艦に降り、佛艦員は之をガラスの破片と見誤り
 したること、始めて分明に歸し、敵味方とも大笑に終りしと云ふ。

機械に注意する古名將

兵力相均しければ、有力なる新機械を用る者に勝の歸すること當然なり、故に古名
 將は、其の時代に於て、不完全ながら、尙ほ工夫を凝らし、新機械を用ふるに注意
 せり、世人が口癖の如く、名將と云へば直に孔明、楠と稱するも理なきにあらず、
 二人共に、當時に在ては、珍らしき機械、又は機械に關する工夫を凝らせし様なり、
 千早籠城の防ぎ方は稍や機械に關するの工夫ありしは誰も知る所なれど、其外にも
 此人が機械の働を用ひし事あり、尊氏が東國より京都に攻入り、南朝の諸將、叡山

より出て、之と戦ひし時、東國武者は騎馬にて官軍を駆惱ますこと多し、楠は之を
 破る爲め、一の機械とも見るべき物を工夫したり、其法は懸金にて大楯を一連に繼
 合するの工夫なり、坂東武者が騎馬にて前面より突進し來るや、楠の兵は大楯をつ
 き列らべ、楯と楯との間に、鎧を懸け、茲に一帶の長壁を築きしかば、坂東武者も
 進み得ざるを、楯の蔭より弓にて差詰め引詰め射落し、坂東騎兵を破りたり、此事
 は太平記にも記せりと覺ゆ。

近世の戦に、重騎兵が突進し來るとき、之を防ぐ歩兵は方陣を作り、前列は折敷で
 銃劍を擬し、後列は此の防禦内に在て、騎兵を射倒すこと普通の兵法なり、然るを
 楠時代に、大楯を懸金にて長壁となし、騎兵を防で坂東武者を惱ましたる杯は、此
 人が戦鬪に於て、士卒の勇氣以外に、幾分か機械の助けを常に工夫せし一證なり。
 又孔明は、最も機械好きの人にて、夫の有名なる木牛流馬は、演義三國志に謂ふ如
 く、重寶至極の機械にはあるまじけれども尙ほ運送には、幾分の利便を興へたるな

らん然れども、孔明の新工夫の機械中にて大に有力なりしは、一種の連弩なりしに似たり、知り得らる、だけの處にては、其の法式は一發に六七箭を飛ばしたる強弩なり、蓋し弩の箭樋が六七筋ありて、一發に數多の箭を飛ばせ而て其箭は鐵を以て作り、長さ七八寸なりし如し、鐵箭なれば重くして力強く、遠距離に達し得て、且つ一發に六七箭を飛ばすとすれば、其時代には無比なる有力の兵器たりしならむ、支那にて通常の弩には、鐵箭を用ゐざりし、鐵を用ひしは此人に限りたる如し。古より日本に無くして、支那に行はれしは弩なり支那の古戦には大弩あり、其弓を張るには轆轤仕掛と横杆の規則とを利用する上、尙ほ三四人して之を引き、其の弓力の強大なるを知るべく、矢の大き九太材木の如きものを百間の外に飛ばし得たる如し、此の類は砲銃なき世には恐るべき利器として或場合に奏功せしならむ、是等のことを思へば、昔の日本は、極めて兵器の種類に貧しかりしなり。

砲の石丸

大砲の砲の字は、今に至るも尙ほ其字の偏に石を用ふ、是れ其昔は、石を丸として發射せしが故なりと云ふ石を丸に用ゐしは、獨り東洋のみならず、西洋にても同様なりしなり、石の丸にては、定て無細工のものなりしならんと思居たりしに、先年伯林の武器陳列所に於て、古代の石丸を見しが、其の製作の巧なるには驚きたり、丸の圓みも眞圓にして石質は緻密を極め、石理は、光滑にて、却て後世の粗造なる鐵丸よりは遙に美事に出來居れり、此の如き石丸ならば、後世の鐵丸に稍や髣髴たる効用ありしならむと思はれたり亦た其の目方も重き様に見ゆ併し元來か石のこととなれば、鐵には及ぶべくもあらず、唯其の手際よく、精巧なるには驚きたり。

六韜三畧

西洋には種々の兵書あれど、是等の目的は、タクチック又はストラテジー、即ち戦術又は戦術を説くに限られたる譯なるが、支那の兵書は戦術、戦術、以外に逸するもの多し、試に七書を見よ、孫子吳子より司馬法、六韜、三略、太宗問答等に至る迄、其論の圍範は全く戦術、戦術、の外に逸し居れり。

支那の兵書は半は政治に關し、半は外交に關し、半は、權略に關す、故に用兵戰爭の心得を説くと言はむより寧ろ敵國を亂だす權謀術數學と目すべし。

日本の今日の兵士を見よ、戰に臨むときは、國の爲に身を忘れ、進むべきに進まずして逃歸る者は一人も無し、先づ兵士は此の如きものと斷定して、然る後に如何なる戦術を用ゐ、如何なる戦術を用ゐて、戰ふべきやを説くこと始めて「戦術」の領分となる、然るに支那七書の目的は、「如何にせば此の如き兵士を作り得べきや」との工夫方法に、其書の一半を費やし居れり、則ち日本の如き兵士を作ることが、先づ第一の苦心なり、其外には、敵國の君臣を離間するなどの權謀、亦た十の二三

を占む、而して實際の「戦術」「戦術」を説くは十の三四に過ぎざるなり、尤も用兵作戰の心得を論ずるの點に至ては、極めて精緻の論なきにあらず、是等は後世に通用すべきものながら、何にせよ一卷の中に治國もあり、外交もあり、兵士らしき兵士を作るの方法もあり、極めて粗雑千萬のものたるを免れず。

特に、六韜に至ては、極めて野卑淺薄の論多し、六韜は、文王武王と太公望との問答に爲り居る處文王武王の問と言ひ、太公の答と言ひ、甚だ其の人物に相應しからぬ評を免れず。

文、武、太公の、時代にて、正真正銘なる書經の周初時代の文章と、六韜の文、武、太公問答の文章とを比較すれば、雙方新古の隔りは幾と六七百年の相違ある様なり、文體の新古より察するに、六韜は蓋し戰國時代の末の兵法家が文、武、太公の問答を假て、兵略の心得を記載せしものならむ、假令漢以前の文章とするも春秋時代の文體又は論孟などの文字に比すれば、如何に少くも三四百年は新しき如し。

但し漢以前のものなるべしと思はる、譯は、前漢の高祖時代の諸策士、諸名士の語は皆な多く六韜中より出で居れり。

例せば、天下を争ふを鹿を逐ふに比するの語、又は狡兔死して良狗衰らるの語、又は天下は一人の天下にあらす天下の人の天下なりの語杯は皆な六韜中に在る語なり

其他史紀杯に記する高祖時代の人物の警語は、六韜中より脱化し來りしと覺るもの甚だ少からず、之を思へば六韜は秦が書を焚く以前、戰國の末より前漢の始の讀書人には極めて廣く讀まれ居たりしものならむ。

其後幾千年の後世に至る迄、支那の士大夫をして、權譎詐謀を懷き其の品格を降ださしめしは、蓋し六韜の罪が居多なるべし、或は淫樂を以て敵國の君相を惑はすの手段の如きは公々然、太公望の答として、六韜中の處々に明記せらる、兵は詭道とは言ひながら、敵を破る爲めに敵國の君臣を腐敗せしむる有らゆる手段を述べて憚からざるの一事は太公望の人格に不似合なるは勿論、後世有識の士すら之を口にす

るを恥づべき程のことをさへ公然と説法す、之を讀み之を味はゞ、苟くも敵對の地位に立つ者を陥るゝ爲には如何なる卑劣手段を施しても苦しからずとの觀念を、支那後世數千年の士大夫に吹込みたるは皆六韜の罪なり、若し六韜が眞に太公望の答辭ならば、春秋時代に、齊人が魯に女樂を贈り、魯君を惑はせて孔子を去らしめたるは、能く國祖の傳法を行ひし者と云ふべきのみ一笑に價す。

但し七書中にも、孫子だけは、本人自ら著はしたるか、或は門人の記載せしやは知らねども流石に品格あり、又其の説く所も、治國或は外交に涉ること少く、事概ね用兵の略に關し、如何にも儼然たる處ありて、讀者をして襟を正さしむる迄には至らねども、尙ほ兵家の机上に陳して恥かしからざるの思ひあらしむ。

孫子に次では吳子なるべし、然れども此人の書は、戰略戰術よりも、寧ろ治國と日本ほんの如き兵士を作るの方法を主として戰略、戰術は、却て之を後にせるの觀あり。

黄石公の三略と稱する書も、亦た後人の作なるべし、下て太宗問答の如きも、餘り

感服せぬ様なり。

併し右は概評に止まる、若し七書の一章一句を細かに玩味するときは、人情の微を穿ちたる警句少からず、或場合には人を益すること言ふ迄もなし、併し余の幼時に或る老輩が「七書は一たびは繙くべきものながら、若し平時に於て苟も之を用むと欲するあらば其人必ず不正なり」と評したるを記憶す、蓋し至言なり、平生に六韜などを見て之を悦ぶ者は、動もすれば人を陥れて勝を取るの習を生ずべし、此點に至れば、西洋今世の兵書は、戰略及び戰術を説くに止まり、風教を害し人を墮落せしむるの憂なし、是れ其の圍籠の劃然として、兵事のみに限られ居るを以てなり。然れども支那の兵書は權謀術數の本家ほどありて、中には實に警拔、人を服するの文句あり、例せば司馬法の中なる

殺レ人安レ人殺レ之可也
攻レ國愛レ民攻レ之可也

以テ戰止レ戰雖レ戰可也

の如き、又三略の中の

不レ爲ニ事先ニ動而輒隨

の如き、又六韜中の

以ニ天下之目視則無レ不見也

以ニ天下之耳聽則無レ不聞也

以ニ天下之心慮則無レ不知也

の如き、又

無レ取ニ於民者取レ民者也

無レ取ニ於國者取レ國者也

無レ取ニ於天下者取ニ天下者也

の如き、言簡にして意盡きす、動かす可らざるの面白味あり。

併し要するに、權道の外に出でず、其の民を養ふを説くは、之を己の用たらしめんが爲めのみ、民其者の爲めに謀るにあらず、之を營れば牧者の牛豚に於るが如し、之を肥やすは秣さに以て之を屠るが爲めのみ、支那兵書の目的は多く之に類す、然れども兵家者流も亦た自ら白狀せり、則ち六韜中にも「三略は衰世の爲に起る」の語あり。

廿五節四萬噸

通常の商船にて今は二十五ノット速力のもの新造するの企あり、現に大西洋のキューナード線の如き、來々年に竣工の筈なる一艘は、大さ四萬噸なるのみならず、速力は二十五ノットを附し居れり、通常商船すら斯の如し、況んや軍艦は一國存亡の命脈の懸る所、經費の多少は顧みるに遑あらず、如何なる懸賞、如何なる工夫を用ゐてなりとも、他國同種の軍艦より必ず少くも四五ノットを増加せざるべからず。

見え透きたる世界

前記せるキューナード線の新造船、四萬噸に、二十五ノットとは、随分思切たる建造なり、斯る速力、斯る宏大、の船を有すれば、地球の海面を往來するは、東海道の旅行も同様なり、今や世界は誠に狭く成り行きたり、世界の事物は總て見透されたり、最早や面白味の鮮き世とはなれり。

人力にて萬里の波濤を越え難き時代には如何なる國の端に、如何なる面白き珍奇妙の土地事物あるや料り知るべからざるが故に、世界も奥深く、妙不可思議に思はれて、趣味も多かりしに、今日の如く隅から隅迄容易に穿鑿の届く世となりては、人類の想像力も、殆んど面白き種子を失ふたり。

物理不明の時世は、人事に、山川に、動植物に、種々なる神怪不思議の物あるらし、世の中は誠に奥冥、賑かにも見え、面白味もありしに、今は奇妙不思議と云へ

る事は、一切其の隠れ場を失ひ、何事も狭く究屈なる世の中となれり。
 世界百事の本然真相を確むるの知力を増したるは、人類の進歩幸福、此上なき次第
 にて誠に賀すべきこととなり、只人間想像力の世界より言へば、極めて迷惑なり。

蓬萊山

二十五ノット、四萬噸の、船にて世界の隅々を乗り廻すなどは思ひも寄らざりし昔
 に在ては、人の想像力は、随分に妙不思議の面白味あり、彼の東方朔の著書なりと
 云ふ、十洲紀などを見よ、極めて不思議の國土多く、東西南北の海上には、仙人天
 女の棲える國々、彼方此方に在り、誠に賑々しき世の中なりしにあらすや。
 今ま世間に謂ふ蓬萊山も、則ち東方朔の十洲紀に載せられたる一仙島なるが、此人
 の述べたる儘に蓬萊山を繪に描くときは、一寸と差支ある事多し、何となれば斯る
 目出度き仙境を繞る海水は其色青碧にして、風波もなく、長閑やかなる海面なるべ

しと思はれ、圖畫には常に斯く描くもの多し、然るに焉ぞ知らむ、東方朔先生の述
 ぶる所に依れば、此の仙山周囲の海水は、黒色黝冥にして、冥海と名けられ、海上
 は風無き時も常に百丈の巨浪うづまき、居ることあり、なかく長閑かなる海にあ
 らず、是れ天が常人の去來を拒むの手段と見えたり。

扶桑

日本の事を扶桑と記する者あれば、序に之を話さんに、此島も亦た東方朔の述べた
 る仙境の一島なり、此島の環海は前記蓬萊山の水とは大違ひにて、碧色を帯び、其
 水は甘香にして味美なりとあり、島には大なる桑に似たる樹あり、九千歳に一たび
 實を結ぶ、此樹は同根偶生にて謂はゆる連理の木のごとく、別々なる根が中空にて相
 合し、相扶るが故に扶桑と名けられたり。
 又最も面白きは、是等の仙境中には、容易く人間を近寄らしめざるが爲に、四面を

繞るの水は、弱水と稱へ、水の力は弱くして、何物をも浮べ支ること能はず、鳥毛の軽きさへ忽ち沈て浮ばずと云ふ、斯る水なれば、勿論、船などは近づき得ずと知るべし。

十洲記は東方朔が武帝に對して答へたる所を、漢時代に記録せしものと稱す、果して何人の手に成りしや詳かならねども、魏晉以前の書には相違なきが如し、或は後漢、若くは前漢の末にもあるべき歟。

ライオン初見

ライオンの名は、春秋戰國以前、支那の古書には之を見出し得ず、故に此の時代には獅子を知らざりしならんが、十洲記の中には、既に獅子の字あり、漢書に於て獅子の名が見えたるは、蓋し此書を第一とすべし、其の仙境の一なる聚窟洲の所に、天鹿、辟邪、獅子、等の獸ありと記す、然れば神獸として獅子あることをば既に漢

時代に知居たりと見て可なり。

十洲記は無論法螺想像にて、途方もなきことを吹立てたるものなれども、全體武帝は遠略ありて印度西洋迄も使を遣て交通し、兵を出して征服せしが故に、非常に四方の珍品奇物を取寄せたるは相違なし、荔枝の如きも、南方より取寄せて、之を上林苑に移植たるに、氣候寒き爲に、屢々植て屢々枯れ、之が爲め御苑係の植木屋は斬罪に逢ひしことを記したり。

荔枝と龍眼肉

序に話すべきは、我國などにて、荔枝と稱へ、其の生菓をさへ、東京などにて嚙ぎ居る者あり、或人は之を龍眼肉と稱へ、或人は之を荔枝と稱へ、我々も支那又は赤道下に旅行せし時も、矢張り荔枝と同物とのみ思居たり、然るに右は全く龍眼肉にして、眞の荔枝にあらず、眞に荔枝と稱するものは、其大さ鶏卵ほどありと稱す、

但し子の有様は稍や同じ。

龍眼肉は、一名之を荔枝奴と稱す、支那人が龍眼肉のことを記したる文、左の如し、龍眼樹は荔枝の如し、但枝葉は稍や小く、殼は青黄色にて形は圓く彈丸の如し、肉は白くして面に漿を滯ぶ、其甘きこと蜜の如し、一朶五六十顆、穗を作すこと葡萄の如く然り、眞の荔枝が熟し終て後に龍眼肉は熟す、故に之を荔枝奴と云ふ、其の熟すること、常に荔枝の後に従ふを以てなりと、右の記事は則ち我國にて今ま見る所の龍眼肉に符合す、眞の荔枝にあらず。

右の記事は、司馬晋の時に記せられたる「南方草木狀」と云へる書に記する所なり又「バナ、」のことを、我國にては如何なる漢字を用ふるにや、或は蕉實と書するが如し、上記する書には之を甘蔗と名け居れり、好名稱と云ふべし、同書にバナ、の状を記すること下の如し「其子の表皮を剥げば、色は黄白にして、味ひ葡萄に似たり、甘くして而して脆なり、是れに三種あり、子の大きき拇指の如く、長くして而して鋭

がり、羊角に類するものあり、羊角蕉と名く、味ひ最も甘好なり」と、是れ千三百年前の人の記する所。

獅子と彩球の圖

何れの頃よりか始まりけん、支那日本にて、獅子の像又は畫に、獅子が彩球を弄ぶ所あり、余は常に其の何の意味なるやを知らざりしが、右は往々に見掛る圖柄にて、何か出處あるべしと思居しが、八紘譯史に、康熙十七年、西番より獅子を貢獻せることを記す、之を上苑に飼ひたり、其形は稍や虎に類す、少しく金色を含み、淺淡にして、灰色なり、眠る時も其尾は常に動搖す、人に寢ざるを示す云々とて、獅子の状を叙すること極めて眞なり、最後に至り、此獸は彩球を喜ぶ、人が其兒を盜で獅子の追到るときは、球を擲て之に與ふれば、獅子は之れに心を奪はれ、兒を棄て返ると記す、蓋し此の一事は支那に於る古來の言傳を附記したるもの、如し、左すれ

ば獅子ししが彩球さいきゅうを喜びよろこ弄あそぶと云いふは、亦また支那しなよりの傳來でんらいならん。

暖簾

暖簾のれんと云いへるは本來ほんらい支那語しなごなるべし、支那語しなごにては暖だんの字じを「ノン」と讀よむ、今の暖のれん簾すなはは即すなはち「ノンレン」の語ごを詰つめたるものにて、蓋けだし其その始はじめめ長崎邊ながさきへんより初はじめまりしものならむ歟か、簾れんは元もとと風かぜを通つうずる爲ためめ、涼りやうを求もとむる時節じせつに之これを用もちふ、然しかるに暖簾のれんの如ごとく、布ぬの又は他たの風かぜを防ふせぐ材料ざいりやうを用もちひて垂すたかせるものは、即すなはち暖だんを取とる爲ための簾れんなるが故ゆゑに、之これを暖簾だんれんと名なくるなり、予よは初はじめめ「ノン」なる語ごの出所しゅつしょを知らざりしが、支那しなに至いたり、暖だんの音おんが「ノン」なるを知るに至いたつて、始はじめて暖簾のれんも亦また支那しな傳來でんらいのものなるを悟さとれり。

凡およそ慣用くわんよう久ひさしくして日本語にほんごと思おもふものにも、案外あんぐわいに支那根源しなこんげんのもの多おほし、追々おひく寒冷かんれいの時節じせつとなることなるが、老人らうじんなどの用もちふる「湯たんぼ」と云いへるものあり、此こゝ「た

んぼ」なる言葉ことばも亦また支那出しなでの語ごなるが如ごとし、但たゞし「湯たんぼ」と稱しょうし、湯ゆの字じを加くはへたるは、日本にほんにての蛇足だそくなり、「たんぼ」は蓋けだし湯婆たんぱうなるべし。

宋元そうげんの雜記ざつぎ中に「暖足瓶だんそくへいを湯婆たんぱうと稱しょうすと記しるせり、蓋けだし暑中しよちゆうに抱だきて寢ねる竹籠ちくろうを婦人ふじんに擬なぞへて、之これを竹夫人ちくふじんと稱しょうすると同様の筆法ひつぽうにて、足あしを暖あたむるものを老婆らうはに擬なぞへて、之これを湯婆たんぱうと稱しょうせしなり、即すなはち支那音しなおんにては湯婆たんぱうなり、日本にほんに轉訛てんきして「たんぼ」となりしならむ、なれども單たんに斯かく稱しょうしては意味通いみつうじ兼かねる故ゆゑ、又一またの湯ゆの字じを加くはへて「湯たんぼ」と稱とへ來きたりしと見みゆ、宋そうの黄山谷くわんざんこくは湯婆たんぱうを脚婆きゃくぱうとも名なけしと云いふ、然しかれども支那しなにて古人こじんは多おほく之これを湯婆たんぱうと稱しょうしたり。

招牌の奇文

東京とうきやうの街頭がひだうを過する時とき、何心なにこころなく車上しゃじやうより看板かんばんを見みれば、折々をりく珍めづしきもの多おほし、神田かんだ邊へんの或あるる街まちを過すぎし時とき、其その看板かんばんに、「百貨取準ひやくかんとん、衆庶繫信しゆじゆけんしん」と記ししたるあり、何物なにもの

にやと、店の品物を視れば、是れなん度量衡を鬻ぐ店なりけり、如何にも此品には適當の文句なり、蓋し支那の書か又は此の流の者より採りしと覺ゆ、東京に於て珍しき文句と謂ふべし。

又嘗て京都の寺町通かと覺ゆ、無心に見るともなく視れば、「一目瞭然」と書したる看板あり、何物にやと店を視れば是れ眼鏡店なりき、偕は片眼の眼鏡を賣る如く聞こえて可笑し。

人の至情

昔し後漢の郭林宗、樹下に憩ふ、或る者其邊を過ぎしが、後肩に荷ひし陶器、地に落て壊れしも、顧みずしてサツサと往きしを怪み、呼返して所以を問へば、「落して壊れしことは見ずとも知れたり、顧みるとも益なき故に其儘に行くなり」と答ふ、其の常人に異なるを察し、之を引立て後ち遂に著名の人物となりしと云へる物語は、

人の知る所なるが、粗末なる陶器なればこそ壊れても惜しからず、顧みずして濟むべきが、若し貴重品ならむには、無益と知りつゝも尙ほ其損じたる所を顧みるは、人情の常なり、最愛無上の物を失ひし時は、無益と知りつゝも之を顧みるは、英雄豪傑にも珍しからず林宗の鑑識は却て人情に背きしといふも可なり、奈翁の如きも既に其例あり。

千八百十三年パウセンの役は、非常の激戦にて、奈翁は銃劍突撃を用て幸じて勝利を得し程の苦闘なりき、此戦に奈翁の肱股と頼みし大將ジュローは、奈翁より程遠からざる地に立ちしが、敵砲彈の爲めに打倒されて不起の重傷を受け繃帶所に荷ひ去られたり、程なく戦の止むや、奈翁は直に馬を左翼に驅りて、敵の砲列陣地に赴き、馬より下て獨り麥畑の中を過ぎ、大將ジュローを倒せし敵砲彈の發射せらし場所を徘徊し、何の益もなきにつくぐと怨めしげに其所を打眺め、憤然として去り得ざりしといふ。

我が大將の倒されし後、敵砲の有處を見に行きしとて、何の効かあらむ、實に益もなきことなり、此人の智を以てして豈に之を知らざらんや、然れども其の親愛する股肱を失ひし痛恨は、彼を驅て覺えず加害物を見る爲めに赴かしめたり、是處こそ實に人の至情なり、此一事は彼が、其大將を如何に珍重せしか、其愛惜の念如何に切なりしかを示すに足る、此人が將卒の死力を得し一因は、蓋し斯る眞情が時に人目に發現すること多きにも由りしならむ。

菊の本家

楚辭の中に、有りさうで無き花は梅なり、萬葉集の中に有りさうで無き花は菊なり、故に古人も楚辭に梅なし、萬葉に菊なしと言へり、左れば日本の上代には菊なくして、支那より舶來せし者ならむとの説、多し、然れども今の日本の山野に、天然の野菊多きを見れば、其古も同様なりしに相違なく、菊は日本土着の花たりしと必然、

疑なきに似たり、又此花は進化し易きものなれば、今日に愛翫する美事に近きものも、中古には必ず是ありしならむ、必ずしも支那よりの舶來を要せず、但し支那の書籍が日本に輸入せらるゝと共に、我國の歌人も、彼の地の文人等が菊を賞愛するの趣味を學び、且つ菊なる名稱が既に著く支那に現はれたりしが爲めに、直に菊なる名を此花に冠して珍重せしものと見ゆ、さすれば菊は外邦の舶來にあらずして、其名稱こそ舶來を用ひたるならむ、又支那より菊の種が渡來せしと云ふ確證もなし、菊と云へる名稱の日本に渡りし時には、最早や日本には其の實物は必然之れ有りたるならむ、又支那文人が之を賞翫するを知りて、我文人も之に倣ひ一層賞美し始めたるなるべし以前より定めて菊の和名ありしならむも何分支那文學と支那事物流行の世の中なりければ、菊なる名は直に我が文人の爲に採用せられしに相違なし、又一は菊なる語が唱へ易きを以て、長々しき和名は廢せられしにもある可し。今日に於て、菊の培養進化せしは、予の知るだけにては支那よりも日本を優れりと

す、又歐米各國にも今や盛に賞翫さるゝ菊は、元と和蘭より擴まりしものにて、蘭人は之を日本より齎し歸りしなり、此事は彼地にても承認し居る事實とす、然れば今日の進化せる菊が、斯くまで世界に擴まりしは、日本を以て其源、其の本家と稱して可なり。

菊花が、帝室の御紋章となりしは、何れの時代、如何なる理由よりせし歟、其説種々あれども審かならず、何れにせよ、其起源は中古ならむ、兎に角、今日にて歐米諸國に愛翫せらるゝ今の進化せし菊が、日本より出しものとすれば、菊も亦た櫻と同様に、之を我が國花と稱するも不可なし、本來を云はゞ櫻とても同様なり、夫のチエリー(實を主とする櫻)は歐洲にも古くより是あり、而て其花は我が一重櫻に似て、満開の時には、チヨット麗るはしく眺められ得るものなり、然れば櫻は日本のみに在りと云ふを得ず、然れども今の我が櫻花の如く、野生より進化して種々艶麗なる種類ありやと云はゞ右は獨り日本のみに限られたるなり、さればこそ櫻をば我國花

と稱し得るなれ、然らば進化せし菊が、日本より歐米に傳はりし者とすれば、菊を國花と言はんも亦た不可なきにあらずや。

菊花羹

支那は國の古きだけ、食物の調理には實に行届けり、禽獸の肉は勿論、菓實、蔬菜、に至る迄、一切、廢物なき程に調理するの道を知れり、例せば鶏の足の皮を剥き、之に熱湯を注ぎて、其上皮の鱗に似たるものを搔落し跡に遺れる脂皮のみを集めて一種の料理に用ゆ、又鴨、鶩の舌を捨ずして切り取り、之を集めて、舌のみを料理の種と爲す、其他、蔘の若根の軟きもの等、凡そ食し得られるものは一切之れを捨ることなし、豚の血の如きも之を固めて血豆腐とし、吸物の實に用ひることあり、野菜とても風流なる料理の趣向亦た尠からず、菊花の時節となれば、菊花羹と稱するを作る。

其法、好き魚を刺身の如く小片に切り、椎茸、銀杏の類を程能く刻み込み、肉汁にて之を煎、鹽梅を附け、最早や熟し終らんとする時に、黄菊の花片バラ〜にせしものを投入し、少時間煮るときは微かに菊花の香を帯び、なかく〜に好きものなり、日本には未だ此調理法を知らざるに似たり、支那料理人に聴かば其方法は審かに解るべし、好事家は黄花の時節、之を試みて可なり。

扇子の本家

余は先きに、花に於て櫻と菊とは、世界に對し日本が本家たる如しと述べしが器具に於て扇子は亦た日本を本家と稱して可なるに似たり（扇子とは疊扇の事にて、之を團扇と區別す、以下に扇子と記するは疊扇と知るべし）日本人より見て奇異に感ずるは、歐米諸國にて扇子を婦人の持物に限るが如く思ひ、男子が之を携ふれば稍にやけて見ゆること是れなり、譬へば猶ほ蝙蝠傘にて日を避

るは婦人の常とし、男子が之を翳せば、にやけて女らしく見え、歐洲の都會にて日中の傘は、婦人に限るが如きと同様なり。

又支那にては、婦人の持物は主として團扇に限るが如く、扇子を携る者は甚だ稀なり、故に支那古來の畫を見よ、婦人にして團扇を持つ繪は多きも、扇子を持つ繪は幾ど稀れなり。

近着の西洋雜誌を見るに、日本兵が戰地にて恤兵品の扇を用ゐ、暑中に之を使ひながら、陣頭に立つ有様を畫き、此の不似合なる扇を携ふる優しき兵士が、一號令の下に鬼神の如く、敵陣に突入するを想ふときは、頗る奇異の感なきを得ず」杯と記せしものすらあり。

是れ他なし、歐米にて扇子と言へば、にやけて優しきを意味し、婦人の持物に限る如く思はるゝに、鬼神を欺く日本兵が、之を携へ之を使用しつゝあるは、歐米人の眼には、大に奇異の感を爲せばなり。

日本にては、之に反し、扇子は軍中用具の一として古より用ゐられ、繪巻物などにも熊谷が敦盛を呼戻せし時は扇を用ゐ、其他、日の丸の扇は必ず大將の持物の一に數へらる、斯く扇子が日本にて軍器の一となりしも、其元は扇子が我國に於て古くより發明使用せられたるに由るなるべし。

支那にて扇は古代より行はれたれども、是れ皆な團扇にして扇子にあらず、余は嘗て支那人の雜書中に「疊扇子は支那本來の物にあらずして、其昔し日本より舶來せしなり」と記したるを記憶せり。

此記に依て、當時余は種々に考へしが、如何にも支那の古代には疊扇子無かりし様なり、而るに日本には既に唐以前より之れあり、宮中の女官内人等が古くより携へたる檜扇の類則ち是なり、檜扇は一轉して紙の疊扇となり、廣く世間に用ゐられ以て今日に至れり支那にては羽扇、其外に扇と唱ふるものありしかど是れ皆な團扇に屬す、我國より、扇子の舶來せし後にこそ、彼國にても扇子は大に弘まり、從て諸

國にも傳はりしと見ゆ。西洋に於ける扇子の起原は取調べしことなけれども、希臘羅馬の時代には之れ無き如く、其頃の扇は支那と同く、皆な團扇の類に屬す、蓋し扇子は支那日本より彼地に傳はりしものならん。

歐米諸國は、日本支那の如く暑氣甚だしからざる地故に、從て扇子は婦人の持物として、半ば裝飾品に屬し、華奢風流の道具となりしならん、故に今日暑中にてても、彼國にて男子は扇子を携ふること稀れなり。

上記の理由より考ふれば、扇子は其始め日本より諸國に傳はれりと云て差支なきが如し、尙ほ博識の古事家に聽て見たきものなり。

萬歳の祝聲

近年、我國にて目出度く人を祝するときは萬歳と呼ぶ、或理窟家之を難じて曰く、支那にて萬歳と呼ぶは、獨り帝王を祝するに限る、他人には之を用ゐず、日本にて

何事にも萬歳と呼ぶは、濫用に似たりと、是も一理ある申分なり、如何にも、近世支那にては、萬歳と呼ぶは天子に對する時に限るが如くなればなり、然れども彼國の學者中にも、種々の論あることにて、以前は帝王に限らず、何人を祝する折にも萬歳と稱せし例を列舉せり。

帝王に限らず非常に喜びを極むる場合に萬歳を稱へたる例を擧げたる二三を記すれば左の如し。

- 一 戰國策に、馮驩が人民の爲に債券を焼きし時、民皆萬歳を稱す。
- 一 韓非子に曰く、巫の人を祝する時に、使君千秋萬歳と唱ふ。
- 一 新序に、梁君出獵して還る、廟中に入る、萬歳と呼ぶ。
- 一 史記に紀信が漢王の身代りとなり、食竭きて漢王出降ると稱へしに、楚軍皆な萬歳と呼ぶ。
- 一 馮異の傳に、趙臣、兵に將として異を助け、新に絹毅を贈りし時に軍中皆な萬歳と呼ぶ。

歳と稱すと。

- 一 又他の處に曰く、軍士を勞饗す皆な萬歳と呼ぶと。
 - 一 又馬援の傳に、援、侯に封せらる、掾史皆な萬歳と呼ぶ。
 - 一 又甘寧の傳に、寧、魏の營に入て數十級を斬て歸る、營に入て鼓吹をなす、萬歳と稱す。
- 以上の外、尙ほ此例少からず、則ち支那にても、萬歳と稱するは、慶賀の際に、上下を通じて之を用ゐたるものなり故に今日我國に於て、慶賀の際に之を上下に通じ用ゐるも、蓋し妨ぐることなかるべし。

川 柳 點

(卅八年一月の稿)

今年こそ、大晦日には、早く仕事を仕舞ひ、寛りと年を取るべしと何れの家も、大晦日には其の心掛をなすも、何が扱て一年の終りの日とて、折角に外向きの用を濟

せば、家内の用向、元日の支度に、到頭、夜に及び、事に因ると、大騒ぎの中に、
 舊年新年の境目なる、十二時の時計は鳴りて、舊年の尻の事を爲しつゝ、はや既に
 新年に入るの類は、何れの家も珍らしからぬと見え、古るき川柳にも

据風呂に下女が入るうち春になり

蓋し家内總仕舞の殿りとして、下女が風呂に入る頃は、早や十二時を過ること、見
 えたり、昔も今も變らぬものは是等の有様なり。

川柳ほど氣の利きたるものはなし。

むべ山の中に嵐の年始容

これも實際有りさうなことなり。又曰く

歌かるた人と云ふ字に手が五つ

是等も昔の句ながら、今も同様、かるたの句の頭字の人と云へるやつには、五つど
 ころか、十も一時に手が出る如し。又曰く

一日の御慶、巨燵へとりよせる
 旦那様歸宅の後ち夜分に入り、どれどれ新年の名刺を持って來よと云ふは、何れの家
 も似たるものなるべし。又曰く

上るなと言はぬばかりの帳を出し

是は今の若き人には分らぬかも知れず今なれば左の如く言ふを可とす。

上るなと言はぬばかりの箱を出し

これは名刺入れの箱と知るべし、又曰く

嫁の出るまではまだるい歌かるた

佳興に入る頃は、若き嫁さん迄、一座に飛入る、かるたの花の盛りなるべし。又曰く

櫛子に同居、駒下駄と福壽草

是も町家の狭き處には、往々見掛る實景なり。

凡そ川柳は突如として來り、初より其題を言はぬところ妙味あり。

芭蕉は飛び込み、道風は飛上り

若し此句の前に題を、蛙と書きたらむには、興味薄かるべし、其の出し抜けなる處、面白し。

釣れますかなど、文王そばへ寄り

の如き有名の句も其の突如として出る處に妙あるのみ。

釣りなぞもしてみる馬鹿な軍學者

常に文王が來るとは限らず、太公望氣取りの軍學者も困たものなり。

其の暗さ隼太、櫻に突き當り

まさか暗らしとて、紫宸殿の大庭の櫻に突當る程にもあるまじけれども、何かなし

に可笑し、兎角に頼政主従は川柳に引出さるゝものと見え、甚だしきに至ては

其夜ないたは鶴、あやめ、時鳥

品品の悪きことと夥し

惜いこと麒麟びつこを引て出る

西の狩に獲物となりし麒麟は、負傷して跛を引きつゝ出でたるべし、併し随分牽強極まるものもあり。

義盛も飯をくふにはあきれ果て

巴御前如何に勇婦なりとも左程に大飯を食ひしとは限らず、是等はちとまづし。

來は來たが話相手のない徐福

其の當時、徐福は日本の通譯を雇ふ程には手が廻らざりしなるべし。

山姥の能、金時の事はなし

山姥の謡には、其の山住居の景色を説けども、一語の金時に及ぶものなきは、事足らぬ如し、非の打ち處、稍や面白し。

御紀行拜見に能因は當惑し

秋風ぞ吹く白河の關とは詠みて、面だけは日に曝らしても、紀行迄は書かざりしな

らん。

へどを踏みく、辨慶は祈るなり

大物の浦の風波に、皆へどを吐きたるべしとは、よくも思ひ付きたり。

うはばみの時に沛公、抜いだきり

劍を抜いたるは鱗を斬りし時のみ、後はいつも戦に逃げたばかりなり。

さて光る魚と三人初手は言ひ

是等も題なければこそ、面白けれ、若しあらはに題を書かむには何の味もなかるべし。

右の諸句は川柳として先づ品のよき方なり、若し其の秀逸と稱せらるゝものを數ふればいづれも、皆な尾籠千萬にて、士君子の間に語り難きものゝみ、其の愈よ尾籠なるほど其の特色益々著るし、彼の下女の題に於ける如き最も然り。

抓られて下女播木を持直し

持直されては器量、頗る悪し。

凡そ是等の類は、殆ど説くに堪へず、又不思議なることには、平生嚴格一點張りの先生も、一たび川柳を詠するときは、忽ち尾籠千萬に陥る、馬琴の如き其例なり、同人の下女の句に曰く

車井戸下女開いたりつぼんだり

何ぞ其調の平生に似ざるや、然れども歴史に關する者に至ては可笑味あり。

にんにくを吊した様な吳子胥の眼

若し川柳をして尾籠千萬の境より脱せしめば、蓋し詩歌中の珍ならむ。

奈破翁、布烈的力

奇捷を制せんとする者、動もすれば大敗あり、デミチに結局の勝を心掛くる者は、奇捷を避く華盛頓の戦に花々しきことなく、虞蘭土の南北戦争に派手なることなし、